
CROSS...

イイボン

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CROSS

【Nコード】

N5175F

【作者名】

イイポン

【あらすじ】

ダラダラとした高校生活を送る主人公『山岡高貴』彼が毎日の様に通う神社『如月神社』。この日もいつも通り学校帰りに神社に寄った彼はとんでもない体験をしてしまう。

『11月29日…』

『あれは…夢だったのだろうか…きっと夢だったんだろうな…夢じやなかったらあいつら今頃どおしてるんだろうな…』と一昔前の出来事を思い返していた。

教室の端の席。窓際の後ろから3番目であって前から3番目。列5人のちょうど真ん中の席…そこが俺の席だ。

俺は地元の私立高校に通う3年、山岡高貴。ヤマオカコウキ俺は暇な授業の時は、横の窓から見える山にある、如月神社を見つめ考え事をしている事が多かった。

今の授業は世界史、俺に限らずクラスの半数の生徒がこの授業を嫌っている。半数のうちの9割は男子生徒だ。

世界史が嫌いな訳ではない。嫌いなのはティーチャーの方だ。この世界史を担当している清水と言う先生は、兎に角うざいのだ。

まず、女性好き。必然的に女性に甘い。

俺だって女が嫌いなのか？？と聞かれたら答えはNOだ。勿論、俺だって健康的な男、当然、野郎より女の方が好きに決まっている。

それにしても、清水の場合は度が過ぎているのだ。決して猥褻な行動をとるわけではない。ワイセツ

ま…女子生徒からしたら優しい王子様タイプなのだ。俺達、男子にも優しいのであればクラス中の人気者となっただろうに…って俺は

何をくだらない事を考えているのだ…

と頭を掻き（カキ）耄り（ムシリ）、頼杖を着いて目を閉じた。

俺はあの出来事依頼、再びあの世界に行けるのでは無いかと目を閉じる時はいつも胸を躍らせ、少々ワクワクとした気分になる。

でも…あれから丁度1年…やっぱり、二度と行く事はできないのだろうか…

2007年11月29日。

俺は遅刻が多いとの事で、生徒指導室に呼ばれた。

内容など一々先生方に大切な時間を割いて言われなくとも分かっていた。

『山岡：お前ももう直ぐ3年生だ。このまま遅刻が続いたら大学の進学にも響いてくるぞ。2年生の間に悪い癖は直しておいた方が良い。』

どおせこんな内容の事だろう…と俺は大きくアクビし、『ねむッ』と呟いた。

生徒指導の田辺に言われた事は、俺の予想とほぼ同じだった。強いて違いを言つとすると、俺の予想に『色々と悩んでいるなら相談に乗るからな！』と付け加えたと言う感じがした。

おまけに今度遅刻したら、親子面談だそうだ…全くもってうつつ

しい…

『はあ…もお6時じゃん…大体、俺に遅刻するなと言うなら一刻も早く帰らせろってんだ!!!』と俺の行く手を阻むかの様に立ち尽くす身長15センチくらいの空き缶を蹴り上げて自転車置き場へと足をすすめた。

自転車にまたがり、俺はいつもの神社へと向かった。

高校生になってからは殆ど毎日の様に通っている神社だ。理由はと言うと…特に無い!!!

めんどくさがりやの俺が雨の日も雪の日も学校が休みの日でさえもこの神社に来るのだから、この神社には凄い力があるのだろっ。

いつもの様に神社の隅に自転車を止め、【如月神社】と綺麗に彫られた鳥居をくぐって境内へと一直線に進んだ。

『おお高貴!!今日も来たのか。今日はいつもより遅かったからお来ないのかと思ったよ。』と俺に話しかけてきたのはココの神社の主???英明さんだ。ヒデアキではなくエイメイと読むらしい。

英明さんはああ見えてもまだ20歳で俺の兄貴的存在だ。

『ちやつす。今日は、生徒指導の爺に呼ばれてさ…2時間近く説教よ…勘弁して欲しいは…』いつもの様に英明さんには最初に挨拶+愚痴を言うのがお決まりだった。

英明さんは『ハハハハ』と笑い、持っていた^{ホウキ}箒を近くの柱に立て掛けて、掃除を終了した。

どおやら俺が来るまでは落ち葉をかき集めて居たらしい。

11月中旬頃は紅葉が綺麗だったこの神社も、ソロソロ枯れてきたか…と思い、落ちているモミジを一枚拾い、風に乗せて宙を舞わせた。

俺はニヤツつと笑い、咲き誇る紅葉も捨てがたいが、最後の締めとして真っ赤な枯葉が風さらわれ一斉に空に飛び立つのも又、見事。と腕を組んでウムウムと一人で頷いていた。

真っ暗な神社を木達と並ぶほど高い電灯が紅葉をライトアップし、枯れて舞う葉はライトの光の中を抜けると一瞬にして見えなくなる…これまた見事。と俺は電灯をポンポンと叩いて、英明さんが呼ぶ小屋へと足を進めた。

小屋では英明さんが体の心まで暖まるお茶を入れてくれていた。

『なあ英明さん。こんな小屋に住んで不便じゃねえのか???』と俺はいつもの様に思っていながら聞けない…と言う事をとうとう聞いてしまった。

『小屋：ねえ。まあ慣れれば問題ないぞ。』と英明さんは小屋で一番デカイ柱を撫でて笑った。

『ふ〜ん。まあ英明さんが満足なら良いんだけどさ。』と実は俺も、この小屋が結構お気に入りだった。

8畳くらいの小さなスペースに色々と生活必需品がおいであるものだから、空きスペースは3畳くらいだ。小屋で話したりする時はい

つも敷きっぱなしの布団の上に座って話していた。

『そんな事より、お前に見せたいもんがあるんだ。』と俺に懐中電灯を投げ渡し、一人小屋を出て人差し指をクイクイクイツと俺を呼んだ。

見せたいもんって何だろうと思いい、俺は残り少ないお茶を飲み干し、受け取った懐中電灯を手に外に出た。靴の踵を踏んだまま英明さんの後を追いかけた。

『うううう。さみい。何処いくん???』組んだ腕を腹にギュッと引き寄せ寒さを凌いだ。踏んでいた靴の踵を戻しトントンとしつかりと履いた。

『裏だ裏。』と英明さんはニヤニヤと笑いながら言った。

裏に回るのなんて久しぶりだな…と思いいながら英明さんについていった。

今日は、満月か…星も結構でているな。と空を見ながら歩いていたせいで「ブヘッ」っと前を歩いていた英明さんが立ち止まったのに気づかず、背中にぶつかってしまった。

『ほれ!!見てみい!!』と英明さんはなにやらボタンを押すと『カチッ』と言う音をあげ、境内の裏にはが薄暗い明かりで包まれた。

『おおおお!!』と俺はついつい声を出してしまった。裏には一面に芝生が植えられており、見違えていた。

良い感じだろ！！？と言つ英明さんに、うんうんうんつと何度も頷き、何故か俺は靴を脱いで芝生の上に上がった。

『ハハハハハ！！何でお前は靴をぬぐんじゃ。』と英明さんにも突っ込まれ、俺は少し頬を赤めた。でも、大きいベツトに乗るような感じだったから…と告げると、再び笑つて英明さんも靴を脱いで上がってきた。

俺は満天の星空を見上げ、大の字になつて寝転がり『すげえ』つと連呼した。同時に英明さんも同じような事を何度も連呼していた。

俺は眩暈^{メマイ}がしそうな星の数に感動していた。夢のような空にいつの間にか本当に眠っていることにも俺は気がつかなかった…

『君！！！君！！大丈夫か！?!?!?』

『こいつ変な格好してるし…関わらない方がいいんじゃないですか???』

『そんな事言つても、気を失つてゐたいだし、こんな所で放置しておくのも…』

『ん…』人声が聞こえ俺は要約眠りから覚めた。眠ってしまったのか…と思つたのは一瞬で、朝だと気がつくと思底驚いた。

『おお！！気がついたぞ！！お前大丈夫か！?!?!?』

『え!?!』と俺を覗き込むように見ていた一人の男は英明さんではなく見たことも無い格好をした30歳くらいのおっさんが立っていた。

その横に珍獣でも見るかのような目で腕を組んでこっちを見てるオッサンも居た。

こんな所で何をしているんだ！?!?といきなり質問された。

『え！？あの…英明さんは…?!?』と頭を掻きながら俺は質問を質問で返した。

『エイメイ?!?!?誰だいそれは?!?!?』とさつきから俺を気にかけているおっさんが不思議そうに再び俺の質問に質問で返してきた。

俺の答えを待たずに、もう一人のおっさんが『誰だか知らないがエイメイ何ていう人はココには居ない。』と言われた。

聞くとこの変な格好をした二人は警察らしい。どお見ても警察とは思えない格好で本当に警察なんですか?!?と聞くと警察手帳の様なものを胸ポケットから取り出し、テルミナ警察所の隆二・岡野と書かれた身分証明のような物を見せてくれた。

見せてもらった直後の感想は『何だこれ?!?!?こいつらイカレタおっさんか?!?!?』と言うのが俺の正直な感想だった。

今日の朝方この近くに住んでいる住人により『変な人が倒れている』との通報がこのおっさん達の警察署に入り、二人が足を運ばせたらしい。

そこに本当に変な格好をした俺が倒れていたと言う訳らしい。変な格好と言っても学生服だからそれが変と言うのなら俺達の学校に問合せ願いたいね…と俺は少々苛立ちを感じた。

俺とこの警官と名乗るおっさんが質問を繰り返しているうちに俺は
どんどん血の気が引いていく感じに襲われた。

今は西暦2507年11月29日だと言う会話が出来たのが発端だ
った。

『2507年11月29日…』

警官のオッサンの話を聞けば聞くほどコレは夢なんだ…と思えてならなかった。何を言っているのかさっぱり分からなかったからだ。

ひんやりと冷たいコンクリートの様な鉄板の様な…はたまたガラスの様な…簡単に言うともタルで作られたコンクリートの様な地面だ。そこで俺は胡坐をかいて必死に考えた。

しかし、頭の中を整理する時間すらなかった。目覚めた時に一緒に居たおっさんの二人がとりあえず一緒に来てくれないかと、座っていた俺の腕をつかんだ。

『ちょ…ちょっと待ってください！！！どうゆうことなんですか？』俺は自分でも何を聞いているのか分からなかった。

『はあ？？君がココで倒れていると言う通報を受け、我々は来たのだよ？？署まで一旦来てもらい色々詳しい事を聞かせてもらうのだよ。』と答えたのは俺に身分証明書を見せてくれた隆二・岡野とか言うふざけた名前のだった。

二人の警官に引きずられるように俺は彼らの車へと連れて行かれた。

『こ…これ…なんですか！？』と目の前の車を見て俺は訊いた…いや、車と言うより超小型飛行機！？というのかな？？車体は20センチほど宙に浮き、形はパソコンのマウスのような形をしていた。

『は？？お前記憶喪失なのか？？…』隆二・岡野は2割心配そうな目で8割変な物でも見るかのような目で俺を見つめて言った。

一応、記憶喪失ではないと答え、仕方なく俺はそのマウスのような物体に乗り、テルミナ警察所と言う所に行く事になった。

車体は俺の想像通り、2、30メートルくらい宙に浮かびあがって走行した。速度は80キロくらいだろうか…ほんの10分くらいでテルミナ警察所と言う所に到着した。

走行中、俺はずっと景色を見ていたが、ココが何処なのかは全然分からなかった。建物は空まで届きそうな高層ビルがいくつも並んでおり、見た感じでは結構な都会だった。

シューっと言う音を出しながら車は着陸した。同時に車の屋根にあたる部分がウィーンっとな開きおっさん達が降りた。

『何をしているんだ。君も早く降りてこっちにきてくれ。』とオッサンに言われるまで俺は動く事ができなかった。

二人の後ろに着いて歩き、取調室と言う部屋に案内された。署内の人たちもおっさん達と一緒にような変な格好をしていた。…が向こうは俺の服装の方がよっぽどおかしい格好に思えたのだろう。すれ違う人たちに凝視され、変な目で見られた。

取調室の椅子に座るように言われ、俺は言われるがまま椅子に座った。

『飲み物をもってくるから少し待っててくれ。』と隆二・岡野に言われ、俺は頷いた。

俺はその待ち時間にそんなに俺の服装は変だろうか???…など

と、どうでも良い事を考えていた。

俺が今、こんな状況でなかったら奴らの格好を腹を抱えて笑っただろう…男女共に共通して言える事は露出度が恐ろしく高かったと言う事だ。

簡単に説明すると、皆水着のような格好と言うわけだ。水着にひらひらとなにやら飾りのようなものはついていて。まあ着飾った水着だ。もう直ぐ12月だというのに寒くないのかと相手の心配までしてしまった。

部屋の周りを見ていると驚かされる物があつた。カレンダーのような物だ。

【2507年11月】とでっかく書かれていたからだ。どうでも良い事だが、日にちが1日からではなく30日から始まっていた。曜日については何も変わらず日曜から始まって土曜で終わりらしい。

【ここって…本当に500年後…??? いやいやいや、そんなはずは無い、100歩譲って500年後だったとしてもそれは俺の夢の中の話だ。さつさと起きねば…今日も遅刻したら親子面談だ…やばいやばい】

ウィーンっと言う音がなり、ハッと驚き振り返ると奴が居た。隆二・岡野だ。

『ほれ。』と渡された物は四角いパックのような物だった。でも紙パックでは無くなにやら変な素材で出来ていた。少々ひんやりとしている。

どうやって飲むのか分からず隆二・岡野の行動を見ているとパツクの角を食い、そのまま穴の開いた所からガブガブと飲みだした。

『冷めないうちに飲んだ方が良いぞ』と言われ、少し首をかしげた。どう考えても冷たい飲み物だと思ったからだ。俺もおっさんの真似をして、角を食い穴を開けてそこから飲んだ。

驚いた：こんなに薄い素材なのに入れ物は冷たく、中身は暖かかったからだ。

おっさんは不思議そうに、俺をみて『お前もそやって飲むのか：私だけだと思っていた：』と呟いた。一般的な飲み方は違うのかよ：と言いたいのを我慢した。

『で？？？お前さんの名前は？？？』といきなり質問が始まった。

俺は嘘偽り無く答えた。『えっと、山岡高貴です。』

オッサンは少し眉間に皺を寄せ、『高貴・山岡君ね。』とうつつとしそうに言い直し、立て続けに何処に住んでるの？？と言う質問をして来た。

『住所は栄に住んでいます。愛知県名古屋市栄です。』と俺は丁寧に答えた。

『はあ：ちょっと頼むよ：真剣に答えてくれないかな：』と隆二・岡野は頭をボリボリ掻きながら呆れたように言った。

と、その時さっきまでダルそうにしていた隆二・岡野が何かに気づ

いたかのように、目をパツチリと開けて俺の方を見直した。

『お…お前…もしかして過去か未来から来たのか…???』と少々自信なさそうに訊いてきた。

俺は少し躊躇したが『このカレンダーが正だとすると僕は500年近く前から来た事になります。』と自分の夢に何真剣に答えているんだ俺は…と心の中で恥ずかしく思い反省した。

『…ごひゃくねん!!?』隆二・岡野の声は裏返っていた。

内心かなり笑えた。椅子から落ちそうなくらい驚きアワアワアワと回りをキョロキョロと見て動転しているのだ。

そりやそうだろう。500年前の人物と言ったら俺達の年数西暦2007年から考えて1500年くらいの人物に出くわした事になる。

安土桃山時代…いや戦国時代か…最近の日本史の授業でならったとこだ。

今日の夢は面白い。とニヤニヤと一人笑っていると、隆二・岡野が『本物の異次元人…初めてみた…夢でも見ているみたいだ…』と途切れ途切れに言った。

顔をブルブルと横に振り、こんなに露出しているにも関わらず汗だくの表情で俺に話しかけてきた。

『お前さん…思ったより落ち着いているな…混乱してないのか??』と隆二・岡野は椅子の上で正座し、腕を何度も組みなおして落ち着かない様子だった。

『これは僕の夢なんで…その内起きるはずですよ』と俺は爽やかに言
った。

隆二・岡野は考え込むように下を向き、何度も組みなおしていた腕
をほどいて、眉間を人差し指と親指でつまんで少しの間黙り込んだ。

『コレは夢ではないぞ…』と人間の顔と思えないほどの形相で真剣
に言い放った。

『いやいや、夢ですよ。』と俺はめんどくさそうに答えると、隆二・
岡野は真剣な表情のまま話始めた。

『実は異次元から来た人はお前さんが初めてではないんだ。10年
に一度くらいの周期で突然沸いたように現れるそうなんだ。この時
代2507年を基準としての過去人、未来人の異次元人がな。初め
て現れたのは今から100年くらい前の話らしい。』

『2400年くらいだ。初めてやってきたのは50年後くらいの未
来人だったらしい。その人は研究のため体をばらばらに分解され再
生されを繰り返されたのち、何年にもわたって監禁されたと言う話
をおれは聞いたことがある。』

『その後、10年周期くらいに世界のどこかで異次元人が発見され
たと言う事を聞かされたんだ…今までにお前さんを覗いて計9人が
見つかっているんだ。10年くらい前かな、俺が丁度二十歳くらい
の時だ。』

『インペリルと言う国で恐らく100年前の人間と思われる人が発
見されたのだ。過去最高の異次元記録だったと世界中で騒いでい
た。ここ50年くらいは異次元人の研究などは最初の身体検査だけ
になっていたんだ。』

『何らかの病原菌をもっているかをチェックする程度のね。それで、

持つて居なかつたらそのままこつちの世界で生活してもらう。もつていたらワクチンを打ってもらってからこつちの世界で生活してもらう。まだその人たちの世界に戻す方法が見つかっていなくてね…」

『しかし…』と話を続けようとして隆二・岡野は頭をポリポリ掻きだし言い辛そうな上目遣いで俺を見てきので俺は『しかし?』と訊きなおした。

『研究材料にされたんだよ…』と隆二・岡野はもごもごと小さい声で言った。『ふーん。そうですか。』と俺は腕を組み天井を見上げながら応答した。

『きつとお前さんも…』と隆二・岡野が目ギョッと閉じながら言うのがかなりスローモーションに俺には見えた。俺の頭はクエツシヨンマークが飛び交っていた。

『今は夢と思っているかも知れんが2、3日したらコレが現実なんだと思ひ知らされる。一先ず私の家に来ないか?? 詳しい事は家でゆっくり話そう。』隆二・岡野は何故か分からないが俺を家に招待すると言ひ出した。

『へ!!?』俺はなんとも情けない声を上げた。

有無言わさず、俺の手を引き隆二・岡野の家へと連れて行かれた。

『新たな生活…』

俺は隆二・岡野という男に連れられ訳も分からぬまま彼の家に来てしまった。

さすが500年後の世界…というのは嘘びよんで車の進化と比べて建物やその他の家具などはさほど形に変化は無かった。

俺は一応『失礼します。』と言い、靴を脱ぎ…と靴は履いていなかった。そう言えば芝生に寝転がる前に脱いだんだ…と思い出した。

良く見ると隆二・岡野も靴は履いておらず素足だった。俺は念のため靴下を脱いで部屋に上がる事にした。

まあ適当に座ってくれ。と隆二・岡野に言われ、座布団のような物を発見したので俺はその上にすわった。

『さてと…』と隆二・岡野が話し出した。

約2時間にもわたる長編の話だった。が俺にはあつという間に感じられた。

何度も何度も疑問に思った点を聞きなおしたり、分かりにくい所を何度も説明してもらったりして8割ほど今の状況が理解できた。

彼が言った事をまとめるとどうやら本当にこれは夢ではないらしい。今日ココで眠り起きたら、2507年11月28日となっているだけで500年前にタイムスリップなど絶対にしないとの事だ。

現に俺が500年前から来たのだから絶対に無いとは言えないのではないですか???という質問に対して彼は君が来たからこそこの先10年は起こり得ないと言い切った。

要するにもう、戻る事は出来ないと言う事だ。俺も小学生や中学生の頃は何度かタイムスリップや瞬間移動にあこがれたものだが、まさかこんな形で…

彼が言うには俺にとって戻れないという事はさほど問題ではないらしい。俺は大問題だ!!と声を荒げていった。

【君は恐らく研究材料にされる…】と彼が言いだし、さっきまでも威勢の良い声がひっくりかえり、【え!?!?!?】っと俺は力なく言った。

俺の前に来た100年前から来た過去人。俺にとっては十分未来人なのだが、その人が100年もの異次元を超えてきたとの事で特例ケースとし、研究され亡くなったと言う話を思い出した。

500年も昔から来た俺は…と泣き出しそんな表情で隆二・岡野に聞いたが、彼は何も言わず黙って首を横に振るだけだった…

不幸中の幸い…と言うのかな、俺が500年前から異次元移動しココに来た事は彼、隆二・岡野しか知らない。そして彼は俺の公表を控え、ココでしばらくの間、親戚の子として置いてくれるそうだ。

本当にありがとうございます…俺は声に出す事は出来なかったが心からお礼を言った。

これは本当に夢ではなかった。

おれが着てから早1週間が過ぎたのだ。最初の2、3日は悪い夢なら覚めてくれ、と祈りながら眠りについた。それも隆二さんの言ったとおりの結果となった。

『じゃあ高貴、俺は仕事に行くからお前も夜には戻って来いよ！！』隆二さんが警官の姿で家を飛び出していった。警官の姿…とは1週間たつてもどうも思えなかった。

俺は昨日初めて外出をした。昨日は日曜と言う事で隆二さんも仕事はやすみだった。色々はこの辺の事を聞いたりと隆二さんにとって は災難な一日だったに違いない。

けど、文句一つ言わず俺の事を弟の様に思っ て何から何まで世話をしてくれた。

『俺は一人子でな、弟がどうしても欲しかったんだ。と良い本当に嬉しそくに遠慮するな』と言ってくれた事には心の底から安心した。

まずは服装…あの格好で街を歩くのは問題だとのことで、コンピューター、パソコンの進化系の様なものをいじって服を買ってくれた。

誰かが届けてくれるかとおもったのだがコンピュータから出来てきたのには本気で驚かされた。しかしそんな事は序の口だった。

ご飯にしても変な四角い機械、俺達の時代で言う電子レンジの様な物に材料費（お金）を居れるとそのお金で作れるメニューが一覧となつて映像に映し出される。それをタッチパネル感覚でタッチするものの5分で出来上がってでてくるのだ。

見た目はパソコンや電子レンジだが中身の性能は俺達の時代では考

えられないほど進歩していた。そうそう、予断だがこの時代にはお金の単価が円ではなくペルとなっていた。

俺は今日一人で街に出ることにした。露出度80%くらいの服：海パンツの様な短パンにやけにちやらちやらとしたブレスレットのような物を首と両手首につける。コレだけだ。インディアンを想像していただけと分かりやすいかもしれない。

コレがこの時代では普通の格好らしい。と言うより若者の男ならもう少し露出している物の方が良いんじゃないか??と言われたくらいだ。

早速俺はそれに着替えた。これまた驚かされたよ。こんなに露出しているにも関わらず凄く暖かいのだ。俺の着ていた学生服なんか比不上ないほどに。

恥ずかしいと言う気持ちを抑えて俺は図書館に行く事にした。

図書館にはエアバスと言う乗り物で直ぐにいけると隆二さんが言っていた。エアバスから降りると【ライブラリン図書館まで 300M】と書かれた看板のようなものが立っていた。

つつい『ライブラリンって何だよ…せめてライブラリーだろ…』と口ずさんでしまった。

それともう一つ、あんなに性能の良い家電が一般的に出回っているのに公共の看板はさほど進化していない事に疑問を抱いた。

看板の指す方角に歩いていると、『よう!!!』『うつす!!!』『おはよッ!』とすれ違ったびに俺と同じくらいの歳の人から声を掛けられた事には少々驚いた。

男性、女性問わず、図書館に着くまでに軽く10人くらいには声を掛けられた。

俺もかけられるたびに『おう!!!』と応答しているのだから不思議なもんだ。500年もの年月が過ぎると人見知りと言っ言葉は消えるのかねえ…と少し思った。

コレだけ色々な事が変わっているのに言葉だけは全くかわって居ないのは本気で助かった。

声をかけられる意外は何事もなく図書館に着いた俺は、とりあえず500年前の資料を探した。

図書館とは名ばかりでDVDのような物が棚にずらりと並べてあった。結局自力で見えなかった俺は図書館の人に歴史の資料が見たいと言い、貸してもらった。

借りたディスクをコンピューターに入れ、検索項目に【2007年】と入力した、0.02秒くらいで検索が終わった。

おもな出来事無し…と画面に出力された時には少々落ち込んだ…

と言うより俺が本来生きるはずの1990年～2090年の100年間のおもな出来事が2つしかのだ…500年も昔のことだ…仕方ないか…と自分達の歴史の教科書を思い出し何となく納得した。

これでは全く調べ物にならないと、俺は図書館を去り速やかに帰宅した。

何もすることがなくただぼーっとしていると『ただいまあ』と隆二さんの声が聞こえた。隆二さんの帰宅は昨日より遅かった。

『なあ高貴！！お前高校ハイス쿨に行かないか？！？』と近場の高校のパンフレットを持ち帰っていた。パンフレットと言ってもこれもDVDのようなディスクだ。これで帰りが遅かったのか…

『高校なんて無理だよ…土地感も全然ないし、隆二さんは俺の事を500年前から来たって知ってるから良いけど普通の人は知らないんだしさ。それにボロをだしたら…』と俺は語尾を濁らせた。

『何言ってるんだ。お前なら大丈夫だ。勉強をしないとだめだと言ってるんじゃない。学校に言って仲間を作れと言ってるんだ。俺だって500年前の化石に勉強力なんて期待しちやいない』キツパリ言われて少々むっとした。

『それでも俺はまあまあ名の通った高校に通ってたんだぜ！！』と少々見栄を張った。

『へえ…ちゃんと言ったのか？？』と訊かれ、痛いところ突かれたなと思いつつも『おう！！』と答えた。

『じゃあこの辺で一番賢い所に明日面接に行くぞ。』と隆二さんは嬉しそうに言い、俺は拒否する事すらできなかった。

『高校かあ…』

と…こつちの世界で今後も生活するしかないのだから知り合いは欲しい。というワクワクする気持ちと、ちゃんとやっていけるのだろうか。と言う不安の気持ちちが俺の思考回路を鈍らせ結局、隆二さんに任せ俺は明日高校の面接に行く事になった。

『受験前夜…』

未来に来て1週間が過ぎ、俺は明日高校の面接に行くらしい。

トントン拍子で物事が進み、ココ一週間で色々な疑問を抱きまくった。己の状況把握に戸惑いその疑問達の群れは後回しにされていた。

俺は要約頭の中が整理できるくらいに落ち着いてきた。

隆二さんの家の裏にはにあるやたらとデカイ『羽樹の木』。

その木に登り、羽の様に平たく大きい木のベツト見たいな枝に寝転がり、500年と言う長い年月を経てもなんら変わることはない…
暗い夜空に堂々と輝く大きな月を見上げて俺は一人考えていた。

ゲームや漫画、ドラマやアニメ、そうゆう類で異世界、未来、過去に飛ばされてしまうなどと言う話は良く見たことがある。

俺の中ではフィクション、そう。作り話だと思っていた。しかし、現実が起こってしまったのである。そんな事ってあるか??

ココで俺は残りの人生を過すのか???…高校に通うって…本当に大丈夫なのかよ…

俺は意外と何でも簡単に受け入れれる性格の持ち主だが、流石にこんな出来事には受け入れるのに時間がかかりそうだ。

そもそも本当に、受け入れて良いのかすら分からない…

家族、友人…英明さん…いきなり消えてしまった俺をどお思っているんだろう…

寂しい…という気持ちが炭酸のジュースを振ったみたいに一気に胸の奥から込上げてくるのが分かった…自分の意思では止める事が出来ず胸の奥から噴出した思ひは俺の目から涙となってこぼれ落ちた。

『ちきしょう…何泣いてんだ俺は…』歯を食いしばって必死に涙を止めた。止めたと言うより枯れるまで泣いた…と言う方が正かもしれない。

赤く腫れ上がった目を擦り、大きく深呼吸し【もう、泣かない】とあの月に誓った。

『ひよつとしたら英明さんは高貴より驚いたかもしれないな…いきなり隣で寝てた人間が消えてしまうのだから…』

【！！！！！！！】とつさに俺は体を起こした。

心拍停止を俺は覚悟したね…おまけに研究材料にされることも。

声の主は隆二さんだった。

『隆二さんか…驚かさないでよ…誰かに聞かれたかと思った…』

『ハハハ。俺が登ってくるのにも気がつかないなんてよほど集中して考えてたんだな。で、度々でてきた英明さんってのは誰だい？
？？』

『あつちの世界の兄貴的存在っす。』と笑って答えた。

『ふーん。まあ色々と突然の出来事で厳しいかも知れないけど、こつちの世界では英明さんに代わって俺が色々と助けになってやる。』

だからあまり心配するな。それに高貴は凄いと思うぞ。』

『え！？』何が凄いかと隆二さんの話を割いて聞いた。

『そりやお前。500年もの時空を超えて来て、初日に俺と打ち解け、ものの1週間で冷静に考えるほどまで落ち着いてるんだもんな…すげーよ。俺だったら…』と隆二さんはウムウムと頷きながら言った。

正直俺からしても、隆二さんの存在は計り知れないほど助かっている。隆二さんが居なかったら…あの時の警官が隆二さんじゃ無かったら…きつと俺は…

『隆二さん…本当にありがとう…それとこれからも宜しくです。』俺は珍しくしっかりと頭を下げた。

ココは俺の居た時代とは全然違う。こつちの世界で隆二さんに見放されたら…そう思うと真面目に生きねば…と自分自身で己の背中を押した。

『まあ…なんにしても、戻れる日が来るまではこつちの世界で上手く生活するしかないな…』と隆二さんは照れくさそうにこめかみ辺りをポリポリとかきながら言った…ポリスだけに…失敬。

『ういっす！！明日の面接は隆二さんも一緒にきてくれるんすよね！？！？その…高校の事で色々と質問があるんですけど…』

『そりゃ。そうだな。学校の事とか何にも分かってないんだもんな。学校紹介の資料でも一緒に見るか。』

『ういー！』

『羽樹の木』この木は人口的に作られた木らしく、隆二さん曰く家具の一種だそうだ。俺達の時代にあったハンモックの進化系がこの『羽樹の木』だろう。

俺が登る時はよじ登ったのだが、羽樹の木は枝が螺旋階段のようになっており、簡単に登り降りすることが出来るらしい。

木を降りて俺と隆二さんはリビングへ向かった。

隆二さんの集めた近辺の高校の資料は7校分もあった。隆二さんが俺に薦めてきた高校はキュリアス学院という学校だった。

選んだ理由は単にココからの距離が近いと言う所にあるとの事だった。…俺としてもその方がありがたい…なんせ俺は朝が大の苦手だからだ。

『ん！？隆二さん。距離だけ考えるとキュリアス学院よりインバルト高の方が近くないすか！？』と地図を見たまま隆二さんに聞き、即答しない隆二さんの顔を見上げた。

『まあ…そおなんだが…インバルトはこの辺で最も頭の悪い高校なんだ…仕事とは言えお前の通う学校に行くのは嫌だしな…できればキュリアスくらい为学校に通ってほしい…かなあ…と。』

隆二さんは最後に『まあ最終的にはお前が選んでくれれば良い！』と優しい声をかけてくれた。

『ふうん。そつかあ。じゃあココは無しっと。』インバルトに罰印をつけた。

『キュリアスはどれくらいのレベルなんすか?!?!』と隆二さんのお勧めする高校の学力を訊いてみた。

『キュリアスはこの周辺では3番目だな。中の上といった所かな。』

ふんつと相槌を打ち、俺は適当に資料を眺めていた。

【どれも、似たような感じの学校だな…これなら隆二さんに任せて、キュリアスって学校に通おうかな…】と思った時、俺の目に信じられない文字列が映った。

… 魔法の授業も開始しました …

俺は自分の歳も忘れ、恥ずかしい事に魔法と言っ言葉に目をキラキラとさせてしまっていた。

いやいや、それだけではない、もう既に頭の中では魔法を唱えたりしていた…

そう。完全に妄想の世界に入り込みニヤニヤとあれやこれやとやりたい事リストを作り上げていたのだ。

『隆二さん!!!俺、ココが良いです。』と熱意を込めビシッと指差した。

俺の指差す場所を見るなり、『エルピネス学院か…無理だ。やめとけ。』隆二さんは即答した。

崩壊した。俺の頭の中で積み上げてきたやりたい事リストたちが、あれよあれよと崩れていった。

500年ものタイムスリップをし、初めてこつちの世界に来て良かったと感じた俺の夢はものの15秒程で無になった。…仕方ないか…

『やっぱり高いんですか???』と俺にとって諦めるしかない理由の一つはお金問題だ。居候の身分で贅沢など言えるはずも無いからだ。

『いや、金は只だ。国がだしてくれるんだ。言わば入学できた人たちは全員特待生…そうゆう事だ。』隆二さんは腕を組み、勝手に頷きだした。

『え!?!お金かからないなら無理な事なくないすか!?!』

『いや…あんまり言いたかないんだけど、ようはココの問題よ。』と隆二さんは右手人差し指で自分の頭をトントンと叩いて見せた。

『…』

『それに、入学さえ出来てしまえば只なんだが、受験料が鬼の様に高いんだ。一発で受ければかなりの儲けだが、そうそう受かる奴はおらん。』

『どれくらいなんです?』と俺は少々力なく訊いてみた。

『毎年受験者数でかわってくるんだが、今年は…75万ペルだ。平均は120万ペルらしい。今年は受験者が沢山居たらしいな。』

1ペル = 1円

『じゅ…受験料でその値段はボッタクリじゃないすか…』あまりの高さに声を荒げた。

俺達の時代でも私立、公立、県立、都立、国立…など色々な高校の種類はあったが、受験料が平均120万なんて高校は全国探しても恐らく無いだろう…

『まあそれだけ、価値のある学校なんだ。高貴もコレをみて決めたのかも知れんがココでは魔法を習う事が出来る。この時代においても魔法の存在は大きいんだ。それに入学さえすればただだしな。』と隆二さんは言った。

『俺も一回だけ親に頼み込んで受けさせてもらったが…全然話にならなかった…』とボソボソとかすれた声で付け加えていた。

恐らく大学生レベル、いや大学のトップクラスの問題が出たりするのだろう…少々、知識には自信があったのだが…やっぱり無理そうだな。

『んー。そうだな。よし。今年は安いし、一回だけなら受けても良いぞ…!! 兄貴である俺が受けてお前が受けないなんて可哀相だもんな。』とニツと白い歯を出して笑い、『当たって砕ける』と親指を立てた。

何だろうこの感じ…

好きな女の子と偶然、視線が絡み合ってしまったかのような…ドキリと心臓の右心室と左心室がはじけてしまったような…兎に角胸打たれた感じだった。

『いいんすか…!!?!?!?!』

『おう! 受かったら受験料も只になるしな。その代わり一回失敗し

たら諦めるんだぞ。』

『モチッ』とウィンクし親指が反り繰り返るほどピンと立てた。

『面接試験』

こつちの世界に来てこんなに目覚めが良かったのは初めてだった。
…と言うより受験の事が頭の中を駆け巡り寝るに寝られなかったと言っわけだ。

今日、人生二回目の高校の受験に挑むのだ。勿論一回目は500年前の世界で受けた。500年前の世界と言うと俺が500歳以上に感じられるのは気のせいだろうか…

隆二さんがエルピネス学院に電話をテレボニーかけてくれたところ本日の昼からさっそく着てくださいとの事だ。

時間が少しでも出来て嬉しい反面この待ち時間がたまらなく落ち着かなかった。尿意が近くになり、毎時2回くらいのペースでトイレに足を運ばせた次第だ。

隆二さんにどのような分野を勉強すれば良いのかと訊いても『すみん…エルピネス学院ほどのレベルの勉強は俺にはわからん。』と結局待ち時間…4時間ほど面接練習をした。

家族構成は両親と兄が一人。現在は実家でなく兄と二人で暮していると言っ設定。

親元を離れた理由は『うちの家計は16になると自立するのが決まり』と答えれば良いと隆二さんが言っていた。

何故、今まで学校に通ってなかったか。その間何をしていたのか。と言う質問はほぼ間違いなく来るだろうと言われた。

『ええっと。今より500年昔の話になるんですが、如月高校と言う高校がありました、そこに通学していました。その近くにある如

月神社は私の好きな場所です。『…こんな事は死んでもいえぬ。いや、言ったら死んでしまう。』

その所も隆二さんが考えてくれた。平凡かつオーソドックスだが、まあ妥当だろうとのことと、『都会のケルネスト学院を目指すため受験勉強をしていた』とでも言えば良いらしい。

ケルネスト学院とは、俺らの時代で言う東京大学の様なところだ。まあ高校と大学の違いはあるが、その辺は機転を利かせてくれ。

この時代には高校受験のために浪人する事はごく普通の事らしいので、特に突っ込まれる事も無いだろうとの事だ。

そんなこんなで面接の打ち合わせ（練習）をしているとあつという間に昼になってしまった。

いつも通り、隆二さんがボタン一つで料理を作ってくれ、それを食べ終えると、隆二さんの車でエルピネスに向かった。

『うー。俺まで緊張してきた。今日は休暇をもらって休んでるから受験終わるまでココで待ってるから、バッチリ頑張ってきてよ。落ちてもあんまり気にするな！』と明らかに落ちると思っっているらしい。

『ういー！当たって砕けてきます。』まあ、面接は完璧だが試験の方は俺自身受かる気がしていなかった。

校内は高校というよりショッピングモールのような感じだった。校舎

のつくりは歪イビツな形をしていた。分かりやすく言うならば、机の上に生卵をそのままボトッと落としたような形だ。運動場というものは無く、中庭はどちらかと言うと公園のような感じだった。

校内にも木が植えられていた。これも隆二さんの家にあつた『羽樹の木』の一種だろうか…

綺麗に清掃され、掃除ロボットって言うのかな??? 掃除機のような物が人の手を借りず自動的に校内をクルクルと回っている。

恐らく汚れセンサーがついていて汚れや菌に向かって移動するような仕組みになっているのだろう。人が近づくと廊下の隅に移動し、人間が歩く分には邪魔にはならないみたいだ。

職員室を目指して歩いていると、この学校の生徒と思われる人たちとすれ違つたびに会釈された、いかにも品のある生徒が多いな。と思った。

職員室らしき所を発見したので一応ノックし、応答を待つてから『失礼いたします。高貴・山岡と申します。本日受験を受けに参りました。』…俺はどっかの侍か…イカンイカン。緊張するな。

『こんにちはッ!! 君が高貴・山岡君だね。じゃああの子達と一緒に待つて居てもらえるかな??』

俺に声をかけてきたのは、美しいなんて言う言葉では表現でききれないほど綺麗な人だった。【反則だろ…】

…それにこの格好…この人達にとってはコレが普通だが俺にとってはこの露出度は目をそらさずにはいられなかった。

勿論、俺も立派な狼。目をそらす前に脳と言う瞬間描写記憶装置によつて彼女の姿は一部始終記憶させてもらったがね。フッフ…

(注) 瞬間描写記憶装置というものは狼の中の狼しか持ち合わせない能力なので君にその能力が無いからと言って落ち込むんじゃないぞ。

特別に超分かりやすく説明しよう。ミニスカートにブラ!!それだけだ。狼でなくても野郎には十分伝わるだろう…

おっと…あぶないあぶない。瞬時に色々を考えすぎて先生であるこの人の言った事を無視しかけてしまった。

『あの子達と一緒に待っていてくれるかな。』しか聞き取れていなかった。

すぐさま瞬間描写記憶装置を巻き戻し再生したが…いかんせん。俺が描写したのは…とりあえず俺は『はい。分かりました。』と答え、案内された部屋で待つことにした。

こんな特例の受験と言うのに俺意外にも受験者が居た事には正直驚かされた。【男女ともに1人ずつ居た。】

男はどうみてもがり勉タイプのおぼっちゃまだった。肉付きの良い体といい、綺麗にそろえられた前髪といい。何ととっても極太の黒ぶちのめがね。

どうやら落ち着かないらしく。左足をガタガタと貧乏揺すり…乳酸がたりのないのかねえ…と見ているだけでイライラしてきそうなタイプだ。

それに比べて女の子は凄く大人しそうな子だった。他の子と比べて若干露出度が少ない事が少し気になった。…いやいや、変な意味じゃないくてね。

俺が目を向けると、頬を赤く染め、露出されたお腹の前で腕組をし、隠した。…太っている様には見えなかったが…

『お待たせしました。それでは別室に移動しますのでこちらへ。』
と俺達を呼んだのはさっきの美人ではなく頭が少々薄い男の先生だった。

廊下に出て螺旋状の階段をあがり、20メートルほど歩き、頭が少々薄い先生は足を止めた。

自動ドアの横にはソファのような椅子が置かれており、高貴・山岡さんは部屋に入って、それ以外の二人はココで待っていてください。と言われ、『はい。』と返事し椅子に座った。

……高貴・山岡さんは部屋に入って…『って！！え！！？！僕からですか！？！？』勢い良く立ち上がり、顔を林檎の様に赤く染め、頭をかいた。

頭が少々薄い先生は眼鏡をかけなおす仕草をし、恐らくマイナス点だろう…と感じた。

『クス…』っと笑い声が聞こえた。俺と一緒に受験するこの女の子だ。俺がチラッと目をやると、逃げるように顔を下げ、『が…頑張ってください。』と何故か応援してくれた。

『はいッ。』っと俺も応答し、『失礼します！！』と元気良く部屋へと入った。…

…20分にわたる長い長い面接が終わった。自己評価はさっきのマイナス点を引いても80点はあるだろうと、なかなかの出来だった。

『次は、美咲・紺野さんミサキ コンノを呼んできてもらえるかな』と面接官の一人が言い、俺は『ハイ。失礼しました。』と言い廊下に出た。

ダウン症患者の様に全身の力が一気にぬけ、ソファーに包まれるように腰を下ろした。

『あ…美咲さんって君だよな。次ぎは君だつてさ。頑張つて。』と報告し、俺はこの子の名前は美咲って言うんだ。と頭の中のメモ帳に刻み込んだ。

彼女は、『え…あ…はいッ！』とかなり緊張した様子で、部屋に入っていった。…あの調子だと先ほど頭の中のメモ帳に刻み込んだ名前が無意味になるかも知れないな…と少々残念に思えた。

外に声は漏れないような防音システムらしく、ウィーンとドアが開いて驚いた。…俺の時より10分も早く彼女は出てきたのだ。

『失礼しましたッ。』

彼女はソファーに座る前に俺の横に落ち着き無く座るぼつちゃんに『新輔・子豚君ニイスケ コブタ…入ってくださいとの事です。』と言った。…子豚つて…（おい。

子豚が立ち上がるり、オホツカ覚束無い足取りでドアへ向かい。ウィーンと言う音と共に『失礼します！！！！！！！！』と校内全域に響き渡ったのではないかと思われるほど馬鹿でかい声で入室した。

『どうでした！？！？』…始めに声をかけてきたのは美咲さんだった。まさか彼女の方から声をかけてくるなんて思いもしない俺は、

『えッ。微妙っす。』と答えた。

『私も手応え有りとはとてもいえません。…』と小さくため息を付いて顔を伏せた。

『面接の結果は直ぐ出るみたいだし。もし受かったら次は筆記で…僕はそっちの方が心配です。』

『私も…面接の練習は色々してきたんですけど…試験勉強は全くで…』

俺も彼女も苦笑し、長い沈黙と共に子豚が面接を終えてでてくるのを待った。

カチツカチツカチツと俺達の正面にかけてある、この時代では極レアなアナログ時計がやけにうるさかった。

俺は退屈な待ち時間の間、ずっと秒針を目で追い続けた。そろそろ1000回目くらいのカチツがなろうとした時『失礼しました！！！！』と馬鹿でかい声と共に子豚が出てきた。

息を荒くし、子豚は俺の横の座れそうにない隙間に強引に座ってきた。このクソ豚…ふざけるな！！と思ったのは数秒で、押しのけられた俺の体は美咲さんにべったりひつついた。

災い転じて福となす…まさにこの事。狭苦しいのは正直な感想だったが、嫌な気分ではなかった。美咲さんの香りは良い匂いだった…

この状態が5分ほど続き、ウィーンという音がなり一人の面接官が出てきた。

『えー皆さんおめでとうございます。面接の結果皆さん合格ですの
で、10分の休憩を挟んだ後、筆記テストとさせてもらいますが宜
しいでしょうか??』

『（はいッ）』…3人とも綺麗にそろって返事した。

俺は子豚が面接中の1000回ものカチツを数えてる間に美咲さん
との話題をひたすら考えていた。そして10分の休憩…絶好のお近
づきチャンスと思い『あのお…』と声をかけようとした時。

こともあるうことか、子豚が俺に話しかけてきた。…と言うより俺
と美咲さんにだ。

『この学校の面接はほぼ100%受かるそうなので、あまり浮かれ
ない方が良いでしょう。』…うるせえ。お前に言われなくとも浮かれ
たりなどしない。

『え！？そうなんですか??』と美咲さんは子豚の会話に参加して
しまった。

『うん。僕が聞いた話だと、面接で落ちたという人は居ない。筆記
試験で9割の人が落とされる。…今年の4月の受験者は2000人
近く居たらしい。』

『2000人!!!!??』不覚にも俺も話しに参加してしまっ
た。

『そう。でも受かったのは200人程度だったらしいよ。』と子豚
にしては珍しく落ち着いた口調で言い頭を下げた。

『筆記試験…凄く難しいんだね…』美咲さんまで俯いてしまった。

またしても沈黙の時間が開始された。…今度は400回くらいカチツを数えるはめになった。

『お待たせしました。それでは筆記試験を始めますので…中へお入りください。』

面接官に言われるがまま、俺達は立ち上がり、さっき面接をした部屋へと入った。

『筆記試験』

部屋の中に入ると先ほど面接で使われていた机が消えており、代わりに5人用と思われる横長の机が置かれていた。

『それでは受験者の方は一人分空けて座ってください。』……ほうほう。500年経ったこの時代でも原始的なカンニング予防をしていると言う事に少々驚かされた。

【俺。空。美咲さん。空。子豚】と指示され、その通りに俺は一番左端に着席した。

『それでは筆記試験の科目、及びルールを説明いたします。質問時間は話の最後に設けますので説明中は話を割かないください。』担当の先生が言い、俺達は小さく頷いた。

『まず。試験科目です。国語、クニゴ数学、カスガク化学、バケガク社会、サイエティ英語、エイゴ魔学です。
『……はあ！？！？！英語意外、何を言っているのか俺には分からなかった。』

説明中の質問厳禁と言われた傍から早速質問しなくなったが、試験用紙が配られたら嫌でも分かるだろう……との事でとりあえず質問は避けた。

『なお、6教科で時間は1時間とします。』と担当の先生が制限時間を言っと、なにやらボタンのような物を俺達に配りだした。『開始の合図を出したらそのボタンを押して、テストを開始してください。』

…とりあえず6教科で1時間は短いと思います。と言いたいが我慢。我慢。…何となく子豚が言っていた9割の受験者は落ちるという影が見えてきた気がした。

『次にルールの説明をいたします。そのボタンを押すと試験問題が机に浮かび上がります。1教科1ページで合計6ページあります。右端に出る【次】という項目を選択すると別の科目に変わります。』
『先ほども言いましたが、試験時間は1時間と大変短く、とても全てをじっくりと考えてやる時間はありません。時間分配には十分注意してください。』

『採点基準としましては各科目100点の合計600点分あります。どれをどう解いても構いません。一科目捨てて0点でも他がよければ全然問題ありません。解けそうな問題から解いていってください。』

『最後に。カンニング行為、私語、退席、は禁止です。そのような違反行為を行った場合は即退場で今後5年間はこの学校への受験は認められなくなります。』

以上です。と長々しい説明が終了した。先生は俺達の机の前に置かれた椅子に座り。『質問はありませんね??』と何故か最後は【か】じゃなく【ね】で終わらせ、質問はしてくるなと言われてる様にもとれた。

『あ…あります!!』と質問をしたのは子豚だった。

耳をピクリと動かし、眼鏡を少し持ち上げて『子豚君。手短にどうぞ。』と嫌そうに聞いた。

『ご…合格の最低ラインは何点くらいなんでしょうか…!?!?』…俺ですら何を聞いているのだこいつは。と少し呆れた。

案の定この先生も『それはこちらが判断する事で貴方達が知る必要はありません。』と御もつともな回答を述べた。

『すいません…』と子豚は小さい声で謝罪し、俯いた。

『それでは他に質問はなさそうなので、ソロソロ筆記試験の方を始めます…では始めてください。』と言うと座っていた椅子から立ち上がり、『一時間後に戻ります、皆合格する事を祈っています。』
と言いきそくさと退室した。

流石にコレには3人とも驚いた。個室にぼつりと3人だけ取り残されたのだ。

コレではカンニングし放題ではないか…いや、コレだけの技術が進んでいる時代…恐らく外からでも監視できるのだろうと思い、俺はテスト開始のボタンを押した。

机から電子ペーパーのような物が浮かび上がり、目次には国語、数学、化学、社会、英語、魔学と書かれており、やっと受験科目を理解した。…魔学…ってなんぞや。

横目でチラッと美咲さんを見てみたらなにやら熱中し、机をツンツンと突っついていた。

…凄いな…浮かび上がった電子ペーパーは他人からは存在すら見えない仕組みになっていたのだ。これだと立ち上がって彼女の真上から見ないとカンニングは出来ないな。と技術の発展にまたもや関心した。

おっと、イカンイカン。俺もさっさと取り掛からねば。と俺は自分の一番得意な数学からやる事にした。テストは全て選択式で適当と思うものを指で触れば黒く塗りつぶされる仕組みになっていた。

『なッ！！！！！！！！！！！』問題を見て俺は声を出してしまった。美咲さんと子豚がチラっとこちらを伺った。やべえ…

それにしてもなんじゃこりゃ…何かのヒツカケ問題か！？！？

…数学の問題は簡単だったのだ。いや、簡単なんてレベルじゃない。試験官が間違えたのではないかと思った次第だ。

【問1】 3 + 1 = ? ?に当てはなる適当な数字を次から選べ。 A・1 B・2 C・3 D・4

…はい！？！？考えても分かるはずも無かった。考える以前にこの問題を見たらハテナは4しか浮かばないのだ。

…っへ。まんまと引つかかったなと、採点中にでも笑ってくれや。隆二さん…すまねえ。金はバイトして必ず返却する…

俺は馬鹿正直に全問自分が思うがままにポチポチポチとボタンを連打し、数学はものの1分で終了した。

次に得意なのは化学だが、最初から順番にやれば良いかと、国語をやることにした。…完全にコレは問題を間違えたのだと思ったね。

またしても小学生レベルの問題だった。

【問1】 桜 この漢字の部首と思われるものを次のうちから選べ。 A・木 B・ツ C・女 D・サクラ

開始から20分が経過した。

俺は魔学を残し、それ以外の問題は全て終わった。

美咲さんや子豚の様子を見ると、なにやら相当難しい問題にでも取り掛かっているようだった。

美咲さんは可愛らしく左手の人差し指で自分の頬をツンツンと突付きながら問題とにらめっこしていた。…一方、子豚は…何故か汗だくでウーウーと唸りながら両手で頭を掻き毟っていた…

どうやら問題を間違えられたのは俺だけらしいな…この場合はどうなるのかな…考えても無駄か…

俺は最後の科目、魔学に取り掛かった。

【ん！？…】

問題は一問だけだった。

貴方にとって魔法とはどのようなものかとお考えですか？？簡潔に述べよ。と書かれていた。

俺は大きな四角い空欄の中に【夢】と一文字書いて、全ての科目のテストを終了したのだが、内心は隆二さんには本当に申し訳ない…と言う気持ちでいっぱいだった。

【終了】と書かれたボタンを押すと 御疲れ様でした。次のアンケート

ートに答え、退室したければ退室ボタンを押下してください。と書かれた電子ペーパーが浮かび上がった。

アンケート！？…ああ。コレの事か。

エルピネス学院では魔学と言う分野の授業を設けております。勿論、必須科目ではありません。選択科目です。

魔法と言うものは西洋で生まれた技術だと言われています。

魔法と聞いてあまり良い印象を持たない方も居るかもしれませんが。

仏の法である「仏法」に対し、仏ならぬ魔の法である「魔法」…それを学業として学ぶと言うのが 魔学 です。

仏法学と言い、回復術、精神術、などと仏法を学業とし取り入れている学校も少なからずあります。近年、エルピネス学院でも仏法を取り入れていこうと考えています。

仏法と魔法の主な違いは

癒す能力（心や身体の）傷・病気を治す事。肉体的・精神的苦痛を解消する事 というのが仏法と

傷む能力（心や身体を）傷・病気状態にする事。肉体的・精神的苦痛を与える事 というのが魔法

と言うように元々魔法というものは戦争、抗争、などの戦のための術として使われていたため、人々を不快な思いにさせるものとし、恐れられていました。

しかし我がエルピネス学院では魔法と言う素晴らしい技術を世の為人の為に使用できればと考えています。

勿論、その術を悪用するか否かは貴方次第です。

興味がある方は後ほど改めて詳細を説明いたします。次のうち興味がありそうなものを選択してください。

マジユツ　キジユツ　センジユツ　ホウジユツ　ヨウジユツ　ゲンジユツ　ジュジユツ
魔術、奇術、仙術、方術、妖術、幻術、呪術、興味無し。

ご協力ありがとうございました。

【や…やべえ…マジでうかりてえ…】アンケートを読んだ第一感想がコレだった。この受験に合格しなければ、夢のまた夢の話だった。魔術。幻術。妖術。…とつくの昔に諦め、心の奥底に潜めた【魔法への憧れ】が幼年期の時の様に体中に広がった。

ビイイイイ！！！　　つといきなり大きな音が鳴り、心臓を驚づかみにされたような気分だった。

ウーンという音が鳴り、振り返ると、さっき出て行った先生が立っていた。『皆さん。御疲れ様でした。時間ですので終了してください。』と少し微笑んで言った。

ああ…もお一時間たったのか…俺はてっきり子豚が耐えかねずカンニング行為を行ったのかと思ったよ。

『それでは、採点をしますので皆さんは一階のロビーの左にありません。リフレッシュルームにてお待ちください。』と先生は言い、採点は30分ほどで終わります。と付け加えた。

『結果発表』

リフレッシュルームには俺達意外にもこの学校の生徒が何人かいた。気分的に俺達はリフレッシュルームの隅の方に3人固まって座ることにした。

ここで、ひときわ注目を集めた人物がいた。勿論、美咲さんだ。…え！？…違うつて！？

周りの視線のその又先を良く見てみると注目を浴びているのは子豚のほうだった。『why!!?』…

彼が注目を浴びるのも無理はなかった。

俺や美咲さんはもう子豚の汗っぷりを約2時間くらいにおいてずっと見てきたからもう慣れてしまっただけであって、一般の方々からしてみれば冬にこの汗は異常なのだ。

おまけに、この体系…この鼻息…

『what that???』と彼女達の心の声が俺には痛いほど聞こえていた。

そんな視線をモノともせず、彼は話しかけてきた。『筆記試験のほう…どうでしたか?…僕は思ったより出来たのですが、合格しているかどうかは分かりません。』…そうかい。そうかい。

『えっと。私も意外と出来たんですけど…正直自信ありませんね…』と美咲さんが言ったので俺も便乗した。『俺もっすね…』。

『それにしてもこんな時期に3人も受験者が居るなんて、珍しいですよ。てつきり今日受験するのは僕だけだと思っていましたよ。』

…へへへつと頭をポリポリと書きながら子豚は言った。その際髪の毛の先に溜まった汗が俺の方へと飛んできた。

避けるすべも無く、正面から受け止めてやった。…勘弁してくれよ…

『そうですよね…。私も一人とばかり思っていたものですから…一緒に受ける人が居て…安心したと言うか…落ち着けたと言うか…ありがとうございます。』と美咲さんはお礼を言ってきた。

『いえいえ。そんな俺もたまたま一緒になっただけで…』

『いえいえ。そんな僕もたまたま一緒になっただけで…』

子豚と俺…お互いがお互いの顔を見つめた。綺麗に同時だったんだなコレが…かなり恥ずかしかったが、おかげで美咲さんの初めての笑顔を見れたから良しとしよう。『アハハハ。見事ですなッ』

『そうだ！…もし…まあありえないと思うんですけど…』と子豚は俺の方をチラツと見た。…『ヘツ??』

『もし、ココに居る皆（三人とも）今回の受験に合格したら、どこかでお祝いでもしませんか?!?』…ほう。さっき俺を見たのは一番受かりそうに無いのは俺と思ったわけだ…。満更不正解でもなさそうだが…

無い無い無い。お前一人でパパやママと一緒に祝えば良いだろう。

メンドクサイ事に俺や美咲さんを巻き込もうとするな。もし、ココに居る三人が合格しても、お前との付き合いは今日を持って終了だ…

『それッ良いですね!!私は賛成です 合格している自信はありますせんが…高貴さんはどおです??』…こ…高貴さん!!?!?!

『是非ッ』俺は美咲さんに最高の笑みを向けた。…あッ…

『それでは決まりですね。自分の合格は勿論、お二人の合格も心から祈ります。』と、子豚は心底嬉しそうに言った。

そろそろ、ココに来て30分が経とうとしていた。さっきまでいたこの学校の生徒も授業なのかいつしか誰も居なくなっていた。

子豚と美咲さんはなにやら結構打ち解け、俺達の時代で言う映画や音楽の話をしていた。

俺はと言うと…実は俺も音楽や映画は好きだ。しかしこの時代の事は何一つと言って良いほど俺は無知だった。そんな俺が二人の会話に参加できるはずも無く…『そおおもいません!?』などと聞かれた時に『ですよね。』と答えるだけだった。

そんな居心地の悪い空間から俺を救ってくれたのは、試験官の先生だった。『お待たせしました。結果ができましたのでこちらへ…』との事だ。

どうせダメだろう…と思いながらも、内心ドキドキと胸の高鳴りが感じられた。それは俺だけに限らず美咲さんや子豚も同じだった。

いったい何処に向かって歩いているのか、そんな事は二次でやたらと早歩きな先生の後ろを見失うまいと必死についていった。っと思ったらいきなり止まった。

『それでは合格は3名同時に発表しますので…』

ウィーンと言う音を出しながら開いたドアの先には恐らくこの学院の長と思われる人がコレマタ偉そうな椅子に座って俺達を見ていた。

顔つきはどうも日本人ツポク無かった。置いてはいるが勇ましいと言うか凜々しいと言うか…威圧感があった。

皆さんは三国志の劉備に仕えた武将、関羽こと、関羽雲長をご存知だろうか…知らないのなら是非御覧頂きたい。

彼は正に、関羽だった。関羽の髭ヒゲの色を真っ白に変えたような感じの風貌だ。

『失礼します。受験生をお連れしました。』…『うむ。』…『こいつは何処の王様だよ…偉そうに…』

俺達も『お入りください。』と言われ、緊張の色を隠せず真っ青な顔色のまま部屋に入った。

『この度は我がエルピネス学院への受験ありがとうございました。私はエルピネス学院長の銀二・ランフォードと言います。どうぞお見知り置きを…』どうやら院長はハーフらしい。この院長のモットーは『教師には厳しく生徒には愛情を…』だそうだ。

子豚と美咲さんが会釈したので、俺も遅れながら軽く頭を下げた。

『それでは待ちくたびれたじやろうし、早速合格発表をしましょう。我先にと聞きたい人はおるかのお???』…と院長の言葉に子豚が挙手をした。

『お願いします!!』力の入った言葉だった。子豚はもう覚悟を決めた様にさっきまでとは打って変わってキリッとした目つきだった。

『新輔・子豚君じゃな。479点。んー……………合格じゃ。おめでとう。』…どうやら子豚は合格らしい。まっ、俺からも

おめでとうと言っておこつ。

『え…本当ですか?!?!?…やった!!!やった!!!』つと子豚はクリスマス次の日の朝にサンタさんからのプレゼントを発見した子供の様にはしゃいだ。

よほど嬉しかったのだろう…涙、鼻水をお構いなしで流し、そして最後にはドサクサに紛れて美咲さんに抱きつきやがったのだ。…阿呆。

俺の逆鱗に触れてしまった子豚に渾身の一撃を脳天に御見舞いした。
『美咲さんから離れる!!!』では無く、『先生や院長の前で騒ぐな。』といかにも正等な意見を言った。

倒れてもまだ、『やったやった。』と言っているんだ、本当に嬉しかったのだろう。

『フオフオフオ。流石、高貴・山岡君だ。しっかりしておるのお。』と豪快に笑い院長は言った。

『とんでもございません…』…つて…え???…この人俺の事知ってる!?!?!…まッまさか…俺が500年前からタイムスリップしてこの時代に來た事を…???

『いやいや、筆記試験を満点で通過した生徒は今だかつて一人もおらんよ。600点。文句なしの合格じゃ。』…君のような生徒がうちに来てくれて嬉しいとまで言ってくれた。

『はい!?!?!いや…それは…問題にミスがあつたみたいで…俺のだけ簡単になつていたらしいので…』…あう。せつかく合格したのに

…何を言っているだ俺は…

驚いた院長は隣にいた試験官の教師に訊いた。

『いえ、そんな事はありません。私は3人が問題を解いている所をこの目でずっと見ておりました。問題のミスなどはありません。』
…っと焦って自分を弁護した。

『テスト問題をココへ。』と低い声で言い、『少々お待ちを…』と試験官は急いでとりに言った。

ものの数分で試験官が息を切らせて戻ってきた。持ってきたのは俺達が使ったボタンだった。院長はボタンを押すなり俺を呼び、『高貴君がやったのはこの問題かね???』と訊いてきた。

全てを見たわけではないのでなんともいえなかったが見た場所は全く一緒の問題だったので『はい。』と答えた。

院長の険しかった表情が一気に緩み、『すまん。君には簡単すぎたようじゃね。』と笑って言った。

俺には何のことやらさっぱりだった。あの問題の何処が難しいのだ…

一つ頭に浮かんだのは…500年もの年月を経て人間の学力がおぞましく低下した…あながち間違いではないかもしれない。

コンピューター技術が一般化され、全ての事を機械がやってくれる時代になっているのだから…

俺がいた、500年前の時代ですら、最近の子供の学力の低下を心配していたくらいだ。

まさか…500後はあんな足し算が難しいと思うほどに低下しているとは思ひもなかった。少なからず俺は恐怖を感じた…このままでは人間よりロボットの時代が来るのでは…と。

俺が我に返ったことには、美咲さんの合格発表は終わっていた。結果は合格だった。

美咲さんは自分が合格した事より、俺が満点で合格した事の方がよほど驚いたらしい。何はともあれ、3人ともそろって合格できたわけだ。

『それにしても…高貴さん…満点だなんて本当にすごいですね…』
若干悔しそうに発言したのは子豚だった。

『どうも…』と俺は答えたが、あんな問題満点とったところで何の自慢にもならない…と心から喜ぶ事は出来そうに無かった。

『今度…私にも勉強教えてもらえます???…私ギリギリだったみたいなので…』

『喜んでツ!!!手取り足取りお教え致しましょう!!!』…即答した。…心の底から喜ぶ事が出来た…この時代…んゝ Delicious!!!

『あ!!!…じゃあ僕にも教えてくださいよ。』
『断るツ!!!。ツ近寄るな!!!。』…即答した。

美咲さんが『クスッ』と笑い、俺も『ハハハ』と声に出して笑った。同年代の連中と話、笑うのは久しぶりに感じ、嬉しい気分になった。

『ちえ…』と子豚は残念そうに頭を下げた。…近寄るなは余計だったかな…と俺も少し反省した。

俺達は皆の合格を祝い、馬鹿騒ぎするべく、体全身で夕日のスポットライトを浴びながら子豚の家へと向かった。

『結果発表』（後書き）

お暇な時間であろうと、大切な時間であろうと、私の小説のために時間を割いて読んで頂き本当に嬉しく思います。

私用により11月21日～11月25日までの5日間、今後の小説のネタを仕入れに海を渡り旅にです。（大嘘）…

ですからその5日間は小説を書くことが出来ず更新も出来ません。

この場をお借りし深くお詫び申し上げます。

皆様からのご意見、ご感想、ご指摘を辛口でも構いませんので是非お聞かせください。

感想は皆から見えるから嫌だと言う方は、私宛へのメッセージでも構いません。

皆様が画面越しに泣き、笑い、そして感動できる様な、小説を書いていきたいと思っています。

今後とも宜しくお願い致します。

『子豚家…』

俺がこの時代に来てもう2ヶ月経つのか…

この時代でも雪はふるんだなあ…俺の生まれた時代に心配されていた温暖化も500年後の1月に雪が降れば全然問題ないだろう…と久しぶりに昔を振り返っていた。

俺の名前は高貴・山岡。都内1賢いエルピネス学院に通う1年だ。それも学校始まって以来の天才児として一目置かれている。なんて入試で満点だったんだから。

俺と同じ時期に入学した、新輔・子豚と美咲・紺野の二人とは今や親友だ。

美咲さんの事は初めて会った時からタイプで、…簡単に言うとも一目惚れと言うやつだ。当然、現在進行形だ。

子豚とは俺は絶対に合わないタイプだと、初めて会った時に思わされた次第だ。…まず、名前通り『子豚』だ。肉付きの良い体。荒い鼻息。…一目で拒絶反応を起こした。

それが…俺でも驚いているんだけど、受験合格祝いの時に色々あったな…

受験日の日…俺と美咲さんは帰りに子豚の家でお祝いをしていた。

子豚は思った通りの金持ちで、家にプールまで着いていやがった。俺の兄貴的存在の隆二さんは警察官。馬鹿騒ぎと言っても流石に弁^{ワキマ}えていた。

『（失礼しますッ。）』と俺と美咲さんは玄関までお出迎えなさった子豚のお母上に挨拶した。

『あらまあ。いらっしやい。新輔がお友達をお連れするなんて何年振りかしら オホホホホ。』とまあ台本のようなセリフを吐き。お母上の関心はすぐさま子豚の受験結果へと向けられた。

『ただいま！！受験：合格したよ！！』と院長から貰ったバツチを見せ、これまた恐ろしいほどお母上も感動していらっしやった。感動するどころか苛々が募る一方の生ホームドラマは30分続き、その間くそ寒い中俺と美咲さんは玄関にタダタ立ち尽くしていた。

『母さん、友達も待つてる事だしソロソロ…』と俺達に気を利かせたのか子豚は親元を離れ、ようやく俺達に話しかけてきた。『それじゃあ行こうか』…おっせえよ！！…

『じゃあお母さんは今日出かけるからお留守番宜しくね。お父さんも帰りが遅いみたいだし。ご飯は自由に食べて良いわよ。』と子豚と離れるや否やお母上はお出かけなすった。

『はい。』

『とりあえず僕の部屋においでよ』と断る理由もなく、俺と美咲さんは子豚の部屋へと案内された。

待て…俺の心中でなにやら嫌な予感が漂いだした。…まっまさか…もしかすると…いや、きつとそうだ…そうに違いない…俺はこっそりと美咲さんに耳打ちした。

【NOOOOOOOOOOOOOOOOO!!!】…俺の悪い予感は見事に的中してしまった。…なんと、美咲さんにとって初めての異性の部屋入室が子豚の部屋なのだ…^{ヨライ}齡16にして異性との忘れたい接点を持つてしまったのである。

可哀相に…ああ。可哀相に。心なしか少々美咲さんの顔が俺には雲って見えた。…それは君の目が潤んでいるからだよ…

汚らしい糞豚め…ツペツペツペつと子豚の部屋中に唾を撒き散らした。

『ちょー！！！！ちょっとー！！高貴さん！！何するんですか！！！！僕の部屋で唾を吐かないでくださいよ！！！！汚れるじゃないですか！！！！』と必死に止める子豚に怒りと悲しみで満ちた目を向けた。そんな事はお構いなしで俺を自慢のベッドへと吹き飛ばし、壁のボタンを押し、床を清掃した。

子豚は床の清掃がすむと何やらへんてこな機械を取り出し、『これ…やりませんか？？』と俺と美咲さんに訊いた。やりませんか？？と訊かれても俺は何のことやら分らない……というのが正直な意見だった。

『それ…って…ERSSGですよね…？？私、初めて見ました。』と美咲さんは目を丸くし驚きながら言った。

『これ、この前の誕生日に買ってもらったんだ…へへへっ』子豚は頭を掻きながら若干照れくさそうに、はたまた自慢しているかのようについてのけた。

俺も初めて見たと言う事で子豚にERSSGと言う機械の説明をし

てもらった。

ERSSGと言うのは【Enjoy Real System Service Game】の略らしい。俺の時代にあったPS3がかなり進化したゲーム機みたいなもんだ。一言で言うとなゲーム機だ。どうやらカセットは無料ダウンロードでプレイ可能らしく、その分このゲーム機本体の値段が恐ろしく高い。まさに金を持て余し、なおかつ時間も持て余す、暇な金持ちゲーだ。

ゲームの種類には色々な物があり、RPG、格闘系、テーブルゲーム：etc.とジャンルは俺の時代とさほど変わりはなかった。

しかし、全てのゲームにおいて言える事は、主人公は自分だという事だ。

このゲーム機は特殊な作り方をされているらしい。

この時代から100年ほど前にタイムマシン（時空間移動装置）の開発を行っていた。何年もの歳月と莫大なお金を費やしたがタイムマシンが完成する事はなかったらしい。

しかし、その機械を利用し自分達で作成した空間への移動は可能となったらしい。要は時空間移動は不可だが決められた場所へのテレポートくらいは可能と言う事だ。

そこで某企業がその未完成タイムマシン（失敗作）を買収し、改良ERSSGの作成に成功した。

ゲームソフトごとに用意された空間に主人公が転送され、そこでゲームを本格的に楽しむ事ができるというわけだ。

転送といっても瞬間的にプレイヤーが消え、別の場所に出現すると言っわけではない、このゲームのコントローラーの様なものを腕につけるとプレイヤーは睡眠状態になり、強制的に夢を見せられる。

皆さんも夢はご存知であろう。希望・願望としての夢ではなく、眠ると見る夢だ。

夢は人によってさまざまであり、同一の人でも知覚する現象が千差万別であるが、誰にでも言える共通点がある。

睡眠者（自分）の存在だ。稀に自分の存在しない夢をみる時もあるかもしれないが、殆どの確立で、どんな状況の夢であろうと睡眠者（自分）はその夢に登場する。

睡眠状態に入りプレイヤーが夢を見ると、夢を見る事で作成された自分が、ソフトによって用意された空間に転送されるというしくみらしい。麻雀のゲームなら麻雀卓にすわって居る、みたいにな…

俺は思わず『へえ…すげえ』と本気で感心した。美咲さんも可愛らしい口をポカンとあけ驚いている様子だった。

『まあまあ、説明はコレくらいにして遊ぼうよ。』と俺と美咲さんにもブレスレットの様な…手錠の様なコントローラーを渡してきた。仕方なく…と言うのは嘘で、俺はかなり心躍らせ子豚以上に『早くッ！早くッ！早くッ！』と心の中で叫んでいた。そんな恥ずかしい俺を悟られぬ様、冷静にコントローラーを着けた。

『どれ遊ぶ！！？！？』と豚が訊くと、俺は一目散にRPGの欄に目をやり、食い入るように画面に張り付いた。

これだ！…！夢にまで見たリアルRPGができる…俺が子豚にこのゲームが良いと言おうとした時、『これにしませんか！！？！？』と言う美咲さんの声が響き渡った。

『ええ…メルティですか…？？』メルティと言うのはトランプみたいな物だ。

『ダメですか…！？』

【ト…トランプ…！？！？…はあ！！？！？美咲さん…正気っすか！！？！？トランプなんかわざわざゲームでやらなくとも、今ココで

出来るではありませんか：そんなのダメっすよ！！絶対ダメっす！！と心の中では叫ぶものの声に出す事は出来ず、子豚が断るのを祈った。

『いえ、良いですよ。ではメルティをしますか。』と子豚は嬉しそうに美咲さんに応答した。

何故か俺は子豚に「Fuck off ！！」と呟き、睨めつけた。
『高貴君もメルティでいいですか？』と子豚の問いに『ああ…』と答え深いため息を吐いて腕輪をつけた。

『それじゃあ始めるね！！』と子豚は言い、ゲームを選択し開始を押下した。

全身の力が抜け、ふわあつと宙に浮くような感じになり、3人は眠りに付いた。

意識が戻ると、3人は青色の丸いテーブル囲んで座っていた。このゲームには俺達以外にも沢山の人に参加しており、周りのテーブルでは色々な人がトランプ（メルティ）をしていた。

『ようこそ、メルティシティへ。ゲームの説明はいかがなさいますか？』といきなり訊ねてきたのはメルティのNPCだノンプレイヤーキャラクターだった。

このNPCも実はこの世のどこかに住む人かも知れない。仕事として、ゲーム紹介やディーラーをしてもおかしくはないなと俺は思った。

『説明はいいです。』と子豚が答え、俺達はゲームを開始した。ポーカー、ブラックジャック、大富豪、…etc…どのゲームも俺の時代にも存在したゲームばかりだった。

どうでも良い事だが、俺はどのゲームでもボロ勝ちした。

トランプ（メルティ）をやりだしてそれから1時間近くが経過し、
『そろそろやめてご飯にしますか??』と子豚が俺達に訊き、コレ
にてゲームは終了した。

俺達の担当のディーラーにやめると告げると、現実世界で目覚め、
ゲームが終了した。

『んーああああ!!』と座りながら眠っていたせいか肩や首が
痛く俺は大きく伸びた。

『どうでした!? 楽しめました。!?』と言う子豚に俺も美咲さ
んもYESと答え、子豚は嬉しそうに笑った。

ご飯中…俺達はかなり盛り上がった。それもアルコールのおかげだ
ろう。

未成年の飲酒はこの時代でもいけない事だったが今日はお祝いと言
う事で子豚の両親に内緒で飲み祝った。

アルコールが回ってくると暴露話、恋愛話、コレはどの時代でも一
緒だった。

『子豚との絆』

俺と子豚はこの日に打ち解けた。

酔った拍子に暴露、暴露、暴露、で色々な事を聞いているうちに意外と良い奴じゃん！ってのが俺の意見だった。

それは恋愛話がきっかけだった。

美咲さんかというと酔ったせいか、受験で疲れたせいか、素晴らしきスペックのゲームを楽しんだせいか、俺には分からなかったがリビングのソファーですやすやと眠っていた。

『高貴君は…好きな人とか居ないんですか！？』と言う子豚の質問に俺の酔いは少し醒めた。

俺は直ぐに美咲さんが頭に浮かんだが俺は『今は居ないなあ…お前は！？』と話の矛先を子豚に向けた。【何たる事よ…ああ神よ…美咲さんが好きだと言える強い心を俺にください。】

『え！？んー。僕は…僕はですね…ココだけの話にしてもらえます！？！？』と子豚は一瞬美咲さんをチラッと見たように思え、子豚が答えるまでの数秒間…俺は殺意に満ちていた。

『ああ…誰にもいわねえよ。』

『じ…実はですね…僕、好きな人が居ますッ！！』と大きな声を出し、暴露した…ことより、その後またもや美咲さんを見た事に俺は子豚に対して死刑執行を下した。

『貴様！！…美咲さんの事をいつから好きだったんだッ！！』と

俺は声を荒げて子豚に食いついた。…豚の丸焼きもよし、豚のステーキもよし、豚の角煮もよし…さて、煮て食おうか…焼いて食おうか…。

『いでででででで！！なッ何するんですか！！！！？？僕の好きな人は美咲さんではありません！！！！…あんな綺麗な人好きになっても自分が虚しいだけじゃないですか！！僕が空きなのはエルピネス学院に通う1年生の子です！！』と食いつ俺の脳天に痛恨の一撃を食らわし振りほどきながら言い放った。

『へ！？』俺は子豚の好きな人が美咲さんではないということで、安心し痛みを感じなかった。

『全く…いきなり噛み付く何て酔いすぎですよ！！！おかげで僕は酔いが醒めちゃいましたよ。』

『いやあ。ハハハ！！申し訳ない！！！！さあ飲め飲め！！飲んで忘れたまえ！！』と少々キレ気味の子豚ちゃんに俺はワインを注いで差し上げた。

っちえ。と舌打ちし、子豚は注がれたワインを飲んだ。

『あ！！…さつきは居ないと言っていました！が、美咲さんを好きなのは高貴君じゃないですか！？！？』…痛い。実に痛い所を突かれた。

俺は先ほど神に貰い受けた、【強い心】を活用し、言い放った。『…まあ…な。』

『えええええ！！本当にですか！？！？…………ご愁傷様。』子豚は一回美咲さんを見て、再び俺の方を見て合掌し目を閉じた。

『ほつとけ！！！！！』…酒のせいではなく、体温上昇のせいで自分でも頬が赤くなっているのが分かった気がした。

『まあ…応援しますよ！！！！』…この言葉によって俺と子豚は硬い友情の絆で結ばれたのだ。

この時代だから素晴らしい青春と言えるが、俺の時代でこんな事をしていたら変体だ。無数の星をバックに俺と子豚は握手したのだ。パンツ一丁で…

『俺も、協力するぜ！！！！コニイ！！！！』

『ここにい？？？とは何です？？』と子豚が不思議そうに訊いてきた。

『お前のあだ名だ。新輔・子豚。それを俺の時代風に読むと子豚新輔だ。子豚のコと新輔のニイをとってコニイ。』…とまあもっともらしい理由を述べたが、実の所コニシキみたく太っているからコニイなのだ。

『ふゝん。ところで俺の時代風に読むとは何です？？？高貴君の時代とは？？？』…と子豚に言われ俺の酔いは一気に醒めた。醒めすぎて顔は真っ青になっていた。…しまったッ！！！！！！…

『俺…俺の時代って言う…言うのはな、マイ…マイ…マイブームみたいなもんだ。名前を逆さにして読むってのが俺の中でのやりなんすよ。…』…自分でも何を言ってるのかさっぱり分からなかった。

『へえ…変な趣味ですね。ハハハ。コニイかあ。ちゃんとしたあだ名何てつけられた事無かったし嬉しいです。今まではデブだのブタ

だの…ありがとうございますっ。』と子豚は心底喜んでいた。

俺のボロに対してあまり突っ込んで来なかった事に安心した。というのが一番肝心だが、コニイとあだ名をつけられ喜ぶ子豚が可哀相に思えてきた。コニイとは遠まわしにデブ…と言っている様な物だから…まあ良いか。

『お前の好きな子は可愛い子なのか??』

『ええ。僕は綺麗な方だと思いますが…美咲さんの方が綺麗だと思いますよ。』とニヤニヤとした目つきで俺の方を見てきた。

『まあ…何にしてもお前…もお少し痩せた方が良くぞ…その容姿では落とせる女も落とせなくなる…』と俺の事は棚に上げ、子豚を指摘した。

『んー。そうですねえ…頑張つて痩せます!!』子豚は少し考え…決心したように言った。

それから約二ヶ月が過ぎた…子豚は例の子と、俺は美咲さんと結ばれ…『高貴君!!高貴君!!次の授業は移動ですよ!!寝てないで移動しましょうよ。』

…ハッ…子豚と美咲さんとの出会いを振り返っている間に寝てしまっていたか…

『全く…何ニヤニヤしながら寝てるんですか…気持ち悪い…』…俺は…美咲さんと結ばれたのでは…あれは…ゆ…夢か…

『高貴君!!聞いてます!?!?先に行きますよ!?!?』

『あああ。コニイか…悪い悪い、俺も行くからちよつと待ってくれ。』

『コニイか…じゃないですよ…あんな顔、美咲さんにでも見られたりでもしたら…』と子豚はクラスの女の子と楽しく話す美咲さんをチラッと見た。

『分かってるよ…うるせえなあ。一々彼女の名前だすんじゃないよ。そっちの方が心配だ。』…で俺どんな顔してた??と子豚に耳打ちした。

『なにっ!?それは酷いな…』…どうやら俺は美咲さんが彼女になったと言う夢を見ていたらしく、にやけた口から涎を少したらし、鼻の穴を真つ赤にしてピクピクと動かし、変体そのものだったらしい。…

『そうですよ…それより次ぎ男子は化学の授業なので移動しましょう。』

『あれ??女子は化学の授業は受けないのか??』

『今日は男子と女子は別々に実験すると先週先生が言ってたじゃないですか…』と子豚は俺の問いにめんどくさそうに答えた。

『ああ。そっか。』

【この学校に通うことになって2ヶ月が経つのだが、未だに魔法の授業は受けていない。魔学と言うのは2年生になってからという事で何ヶ月経っても2年になれなかったら受けられないらしい。1年の俺達はまだ魔学の「魔」の字すら学んでいないのである。俺は元々2年生への編入学希望だったのだが、エルピネス学院は編入学を認めておらず、結局俺は1年生として入学する事になったのだ。よって歳は違えど子豚や美咲さんと同学年…そして見事に3人とも同じクラスに…】

化学の授業を受けるため俺と子豚は化学室へと移動した。

化学だけに言えることではなく、全ての教科に言えることなのだが、兎に角学力が酷い…都内の最高レベルの高校にも関わらずやっている事は俺の時代の中学生レベル…いや、それ以下かもしれない。

そんな事は受験の時にうすうす感じていたが、授業というものを受けてみて改めて実感した。恐らく、どの教師より俺の方が賢いだろう…とまで思い始めていた。

化学室に着き、子豚と俺は隣に座った。

『今日は何をするんだ???』

『えつとですね、今日はミジンコという微生物を顕微鏡というものを使用して見ると言う実験ですね。なんだか難しそうです…』…ミジンコはこの時代にも居たのか…生命力や子孫を残す仕組みの方がよっぽど知りたいと俺は思った。

そもそも顕微鏡でミジンコを見るだけで実験と言えるのかすら疑問だった。

『ふ〜ん。』と一応返事し、睡眠と言う名の退屈凌ぎ方法を用いて俺は化学の授業をやり過ごした。

天才と謳われ、初めの1週間くらいは俺も鼻高々の生活を送っていたが、それも段々と虚しくなり、今となっては小学校で授業を受けているようで鼻を高くしている自分が情けなく思っようになってきた。

テルリテルリテルリンリン。終業の合図だ。俺の時代で言う、キンコーンカーンコーンだ。今日も一日寝て過してしまった…

『高貴君。今日はお話があるので僕の家に着てもらえませんか？

??」と寝起きで不機嫌な俺に話しかけてきたのは子豚だ。というより子豚以外はめったな事がない限り俺に話しかけては来ない。少々寂しく思う…

『ああ。いいぞ。俺も帰ってからやる事ねえしな。お前の家か…久しぶりだな。』と俺は内心あのゲームがまたできると心躍らせていた。

『ありがとうございます。では急いで帰りましょう。』…『えっと…あの…その…美咲さんはよばねえのか??』と俺は子豚を見た。案の定笑ってやがった…

『誘うのは構いませんが、ご自分で…』と言われ1分ほど迷ったあげく…やっぱり誘う事ができなかった。…

『念願のRPG…のために』

『全く…高貴君は情けないっすね…告白するわけでもあるまいし…それも僕の家には誘うだけなのに…ああ、情けない情けない。』

子豚の家へと行く下校中俺はずっと子豚の説教じみた嫌がらせを受けていた。

自分自身でも情けない…と反省しているだけに何も言い返せないのがさらに己を惨めにした。

『そお言えばお前の方はもお誘ったりしてるのか？』…いい加減子豚の説教もうんざりしてきた俺は子豚の恋愛状況を聞いてみた。

『え！？！何がです！？』

『だからあ。お前好きな子が居るからあの学校選んだんだろ！？その後の進捗状況はいかほどかと思ってな…』

『いえ、僕はまだ何も。恐らく相手は僕の存在すら知らないと思いますよ。』…子豚はキツパリと言いつつ切った。

『つけ。お前の方が情けねえじゃねえかよ。』と俺もきつい言葉をかけてみたが、『僕は痩せてからが勝負なんですッ！』とこれまたキツパリと言われ俺は呆れるしかなかった。

『ただいまあ…』

『お邪魔します。』…一応挨拶はしたが、子豚家は俺と一緒に帰宅した子豚以外全員外出中で家の中から応答は無かった。

手も洗う事無く子豚の部屋へと直行し、『ちよつと飲み物用意するので適当に寛いで居てください』と子豚に言われ、子豚の体系にあった大きなベットに持たれ子豚の帰還を待つことにした。ベットに机、クローゼット、窓、部屋の物が全て大きく、こんなに広い部屋が狭く感じた。

ごちゃごちゃと物が散らかっている中、ライトアップされたように俺の目に飛び込んできたのはあのゲーム機だった。…何て名前だったな。ああ。そうそう『ERSSG』だったな。

俺の手は引き寄せられるようにゲーム機へと運ばれた。

『お待ちせです。ミカレンジジュースしかありませんでしたが、どうぞお飲みください。』と子豚は上品そうに二つのグラスをわざわざオボンに乗せて運んできた。

『おお、さんきゅ。』

『…あれ??ERSSGやりたいんですか??』…と俺の目の前に置かれたゲーム機を見て、子豚は言った。

『ああ、前にやったときからずっとやりたくてな…俺RPGには目が無くてさ…あの日からずっと頭の中でやってたりしてたよ…』

『ええ…じゃあ僕の家遊びに来てくれれば良かったのに…』

『いや…俺は毎日暇だけとお前のところのお母上やお父上にご迷惑がかかってしまうだろう。』

『いいんです。僕には友達と呼べる人が高貴君しか居ません。そんな大切な友達が来る事を両親が拒んだら僕が許しません。』…俺は

何だか悲しくなってきたよ…頑張れ、子豚。

『そうゆうことなら…じゃあ…遠慮なく来るとしよう。…で、今日
は何か用でもあったのか?!?!?』

…まさか俺が全然遊びに来てくれないから寂しかったなどと言い出
すんじゃ無いだろうな…そんな気持ちの悪い事、言い出しやがった
ら俺はもう二度とこの家の仕切りは跨ぐまい…

『来週、校内テストがあるので勉強を教えてもらおうと思ひまして
呼びました。』…俺は正直安心した。…数秒ね。

『ふゝん。ってお前なあ…そお言う事は来る前に言えよ…』

『ですが、僕がテスト勉強を見て欲しいと言ったら来てくれないで
しよう!?!?』

『ふむ。御尤もだ。』

『じゃあ、告げずに誘うしかないじゃないですか。』

『あほか。俺は帰る。ミカレンジジューズ、ありがとな。じゃっ』

『ちよ。ちよっと待っててくださいよ!!!!』

…と子豚は俺の足にしがみ付き、いまにも泣き出しそうな目で俺を
見つめてきた。…そんな目で俺を見るな。お前にそんな可愛い瞳を
向けられても気持ち悪いだけだ…

『ああもおわかったよ…その代わり、俺が今後ゲームやりに毎日の
様に訪れても文句言っなよ!!!!?文句言ったらゲーム機を持って
帰るからな?!?』

子豚はブルブルブルと顔の肉を揺らしながら首を振り、『はいッ!
文句など言いません!』と嬉しそうに答えた。

『コニイ…子豚よ。今更だがお前は何で俺に敬語で話すんだ???』
…俺は何気ない疑問を子豚にぶつけてみた。

『え!? 年上の人に敬語で話すのは当たり前前の事ではないですか!』
『?』

『なるほど…』…年上とか気にするわりには名前は君付けで呼ぶのね…まあ良いか。

子豚はさっそくテスト勉強をするらしい。

小さいちゃぶ台を出し、ノートと教科書を広げ、鉛筆を鼻の下で挟み悩んで…って言うのは俺の時代のテスト勉強であって子豚達の時代の勉強方法はまた違ったものだった。

木製なのかアルミ製なのかジェル製なのか分からないような小さな机を出し、その机についているボタンを押すと気体状で出来たエア―モニターが浮かび上がった。

そのモニターに自分達の通う学校のバッチを翳^{カザ}すと【エルピネス学院…読み込み中…】と言う文字列が表示された。…読み込みが終わると、俺達の学校のシンボルが映し出された。

子豚がモニターに向かって『3期、校内テスト、仮問題集…』と話しかけると【サンキ、コウナイテスト、カリモンダイシュウ…了解シマシタ。】とモニターからの応答があった。

【Now Lording…】となり画面が暗くなると、2〜3秒ほどで問題が表示された。

『な…なんだこれ!? すごいなあ…』

『え!? 知らないんですか!?!?! もしかして高貴君…勉強とかした事無いんですか??』…どうやらこの作業は俺達が教科書を片手

に勉強するような事と同様でこっちの時代では当たり前らしい。
『あ、いや、その…』と俺が何て言い訳しようか考えていると『まあ高貴君の場合勉強をした事がないと言われても不思議じゃありませんが…』と子豚が勝手に勘違いしてくれた。

ハハ…っと適当に苦笑し、モニターを覗いて子豚がやろうとしている問題を確認してみた。

『ふむ。数学からやるのか。』

『ええ。僕は数学があまり得意でないので、長い時間かけて勉強しようと思っています。』

『そう。がんばって。』

…入試の時よりは多少難しくなっていたが、それでもまだ掛け算と割り算…というレベルだった。

俺の役目は子豚が勉強を終えるまでの3時間、ただひたすら待つ、子豚が分からない問題があったら俺は教える。子豚の勉強が終わるまではゲームもお預けと言うわけだ。…それにしても3時間って…長いな…

子豚は早速、分からない問題にぶち当たり、俺の肩を揺すって質問してきた。

『高貴君…この問題なんだけど…』…見てみると【 $3 + 4 \times 2$

〃 ??】と書かれていた。

『ふむ。これの何処が分からないんだ??』

『いや、分かるには分かるんですが、答えが合っていないんですよ。…それを分かっていると言っているのでは無いのか??』

『僕が解いた答えは、【14】なんです、答えの確認をしたら【

「11」と書かれているんですよ…コレって答えのミスですかね？？」

「いや、俺が解いても【11】になるぞ…お前【3+4】を先に計算しただろ。」「…うん。そうですね。」「

『計算式に掛け算と足し算があつた場合は（ ）で囲まれていない限り掛け算が優先されて先に計算するんだ…』

子豚は数学の先生が言っていた事を思い出したかのように「あ！！」と声をあげ、「ありがとうです。」「と再び勉強に戻った。

何度も同じような事で呼ばれなくなつたのもあり、「引き算も割り算も同じだからな」と先に教えてやると、「そんな事知ってますよ…。」とクソ生意気な口調で言い放った。はあ…少し寝るか…

『高貴君。高貴君。起きて下さい。』

『あ…??勉強終わったのか???』

『はい。勉強終わったので、そろそろ帰ってください。』

『なあにいい！！！』と怒りをあらわにしようとした時『冗談ですよッ！！ゲームでもしますか。』と子豚は笑いながら言った。

『冗談か…もお用無しで追い出されるのかと思つたよ…』…やつと念願のリアルRPGが出来る…俺は秋葉系アイドルのアキハバラ・モエちゃんにキスしてもらえるオタクの様に…失敬。例が悪すぎた。ヒーローに握手してもらえる子供の様に俺は目をキラキラと輝かせていた。

『その前に、最後に一つ質問して良いですか???』

『なんだ…』…人の綺麗な妄想を粉々に砕きやがって…

『高貴君はそんなにぐーたらして、いかにも頭が悪そうなのに、何故勉強が出来るのですか???』

『子豚よ…俺に喧嘩を売っているのかい???』

『いえ、ずっと前から気になっていたもので。』…子豚には悪気など全くないという事は百も承知だったが、一発頭に拳骨をお見舞いし、『影で努力しているからだ』と大嘘を付いた。

『頭が良いのは納得できたんですが…殴られたのには納得できません…』と子豚も俺の頭に拳骨を食らわしてきた。

数分取っ組み合いになり、お互いの体力が切れたことで、仲直りの握手をし、ゲームをする事になった。

『RPGと言いましても色々ありますがどれにします???』

『念願のRPG』

幼児期にどれくらい夢見ただろう。いや、俺の場合は幼児期に限らずつい最近まで夢見ていた。ドラマ、漫画、ゲームの世界にいけたら…と。

決して果たされる事の無い夢の一つだった架空世界へのリアルアクセス。そして俺は、俺達の時代の誰もがうらやむ夢のアクセス権を手に入れたのだ。

『高貴君!!!で…どのRPGをやるんですか??』…おっと、つい妄想に夢中になってしまっていた。

『ああ。悪い悪い。コニイのオススメはどれだ???』

『オススメと言われましてもねえ…実の所、僕あんまりRPGとかやった事無いんですよ…』

『ふむ…』

約2000種類近くあるRPGの中から選べと言われても中々選びきれなかった…しかたないので、ネットで皆のオススメを探してみた。

『一位はコネクションって言うゲームか…』

『そのようですね。コレにしますか???』

『いや、ココは2位のゲームをしよう。』

『え!?!どうして???』

『俺の中で勝手に思ってる事にすぎないんだが、ゲームに限らず1位を飾ってるのには裏がある気がしてな、例えば大量の宣伝をしてるだとか、作った会社が有名でその会社の名前で人気になってると

かな。と言う訳で2位の【The Continuance Of Dream】でもやるとしよう！！名前もコネクションに比べてかつこいいいな。』

『はあ…そおゆう考えだと結局2位も同じだと思っんですけどね…まあ僕は何でも良いですよ。』

俺の変な理由により一番人気のゲームではなく2番人気のゲームをすることになった。

子豚がそのソフトをダウンロードし、二人ともコントローラであるブレスレットを嵌め、眠りについた…

直ぐに別世界に居るのが分かった。広く薄暗い空間に俺と子豚だけが居た。

ここはもう既にゲームの中だろう。隅の4箇所立つ電灯は大きな鐘の様なベルの様な形をしており、ゆっくりと揺れていた。

通所の鐘は揺れる事により音を出すのだが、ここの世界の鐘は揺れる事で光を放っていた。鐘の音を出す根源となる中央の玉が鐘の淵に当たると水しぶきの様に光の粉をばら撒いていた。

『すげえ…マジで幻想的だな…』

『ええ。本当に凄いですね。』

少しすると、俺達の目の前に何やら看板らしき物が、地面からニョキニョキと生えてきた。

『わあ！！！！な…何だこれ！！！！モモモ…モンスターですかねッ！？！？』

『いや、どう見てもただの看板だろ。それにこの看板』 New Game（初めて） “ ” Continuance（続き）

「……書いてあるぞ。……学力が低下しているとは言え、あんな簡単な英語にも日本語の振り仮名が付いているのには驚かされた。」

「あ……本当ですね。僕達は初めてなので左ですね。」

そうだな。つと俺と子豚は看板の矢印の方向へと進んだ。俺達の進み道はさっきの電灯鐘ライティングベルの光の雫が俺達を導いてくれた。

手を引かれる様に光の示す道を進んでいくと、俺の身長身長の3倍程の大きさの洋風のドアがあつた。

「コレをあければ良いのかな!?!?!」

「はい。ココ以外に進むべき道はありませんしね。」子豚は周りをキョロキョロとみながら言った。

大きさは裏腹に扉は俺が少し力を加えただけで ガガガガガッ という音をあげながら開いた。

【「ようこそ、The Continuance Of Dream……夢の続きへ。私はこのゲームの案内役オペレーターの【ミリア】と言います。アクセス場所が日本という事ですので、出力言語は日本語で宜しいでしょうか?」】

扉の向こうに居たのはどうやらこのゲームのオペレーターらしいミリアと名乗る小悪魔っぽい女性だった。

「え!?!?まあ……はい。」と子豚が戸惑いながら答えた。

【「それではゲームの説明に入りますが、宜しいでしょうか?」】とミリアさんの問に「はい」と答える以外の回答が思い浮かばなか

ったのでセオリー通り『はい』と答えた。

【『それでは……ごッ……ああ、-ああ、-えッホ……！カーッペッ……！！失礼いたしました。』……可愛らしい顔のわりにやる事はオッサンだな……と俺と子豚は顔を見合わせ苦笑した。

【『このゲームは三人一組で行うゲームとなっております。概要としては、私がプレイヤーを ドリムリミット と言う世界の ウェルチ へ転送します。そこからプレイヤーの皆さんにはドリムリミット最大の夢の街、 ユーティリティーシティ を目指し旅をしてもらうというゲームです。【姫を救うために】だとか、【世界の平和のために】だとか言う目的は一切ありません。ただ、ユーティリティーシティを目指すだけです。』】

【『以上で主な説明は終わりますが、質問等はありませんか！？』】

俺とほぼ同時に子豚が挙手をした。そして子豚が指された。

『えつとまずスリーマンセルとおっしゃいましたが、僕達は二人しか居ませんが……それでもプレイできるのですか？？』……うむ。俺が聞いたかったうちの一つだ。

【『それは勿論ツプレイ可能です！！足りない一人分はこちらがNPCを用意いたします。人工知能を積んだ特殊生命体のNPCなので普通の人間と変わりません。NPCはNPCですが 知らない人とも思っていたければ結構です。なお、最初に二人で登録されますと、後々に一人追加し自分達で用意した三人でプレイしたいと言われなくても、それは出来ませんので良くお考えの上、開始してください。』】

『複数人：二人以上で始めた場合は、続きをプレイする際に一人でもプレイは可能なんですか???』…子豚よ、良い質問だ　！！

【『一人でのContinuanceは認められておりません。登録された人数、そして本人である事を確認してからContinuanceをプレイする事が出来ます。』】

『だそうですが…どうします???』と子豚は俺に質問してきた。
『どうするも何も、二人でやるしかないだろ???』

『僕…まあ…おせっかいかもしれませんが、美咲さんを誘ってみたらどうでしょうか???』

『はい!?!』…子豚が突然【美咲】と言う単語を出してきた事に驚き声が裏返ってしまった。

『恐らく、このゲームは長くなると思います。そこでですね、美咲さんも一緒にプレイすれば高貴君との関係も今より良くなるのでは…と考えたのです。』

『お前って奴は…ホントおせっかいだ…が良い奴だな…美咲さんがOKするなら俺は是非その3人で旅がしたいが…』

『では、明日。学校で聞いて見ましよう。当然誘うのは高貴君ですよ!?!』

『…ああ。分かったよ…』

『ミリアさん。質問を再開しても良いですか???』

【『はい、どうぞ。』】

『僕達が最初に転送される、ウェルチと言うのは何ですか???』

【『ドリームリミットの中にある一つの街の名前です。その街へ転送するのです。』…なるほど。最初は野原とか森の中ではなくご親

切に街に転送していただけるのか。

『僕からの質問は以上です！！高貴君は何かありますか？？？』

『ああ。俺から一つだけ聞きたい事がある。こっちのゲームの世界での俺達の体力はどおなるんだ？？走ったり、戦ったり、時には死んだりもするんだろ？？？』

【『はい。勿論、どれもこのゲームをプレイする上で一度は体験すると思われます。走ったり、戦ったりはそのプレイヤーの基礎体力に委ねられます。そしてこの世界で学んだ事は現実世界でも生かされてきます。例えば、走ったりすると現実世界で疲労は蓄積されません。しかし、戦って傷ついた体に関しては現実世界には全く影響されません。ゲーム中は傷ついたりすると体が重くなり動きにくくなるという現象が起こります。最後に死亡してしまいますと、現実世界にも影響してきます。』】

『（（えッ！！？））』

【『ご安心ください、ゲーム内で死亡した場合は現実世界で目覚めてしまうと言っただけの事です。』】

『なんだ…それだけか…焦ったよ…』

【『しかし、複数でプレイする際にプレイヤーの誰か一人でも死亡してしまいますと、死んでいないプレイヤーの方も現実世界で目覚めてしまうので注意してください。それと、死亡により強制的に現実世界へ戻された時は戻されてから12時間はプレイ不可となっておりますのでご了承ください。以上です。』】

ミリアさんは、ダラダラと説明し、俺達がもう質問はありませんと言うと、【『最終確認です』】と言い、二人でプレイなされますか????と訊いてきた。

結局、俺は子豚の提案に乗る事にした。俺としては正直美咲さんが一緒にゲームなんてしてくれるとは思っていない。

…がこのままクラスメイト止まりで終わらせたくない…と、俺にしてみれば珍しく心の中で恋の炎が燃え上がっていた。

『では明日、美咲さんに聞いて見ましょう。もしダメだとしてもその時は二人で友情を深めましょう』…絶対に嫌だ…

『念願のRPG』（後書き）

11話までの御閲覧ありがとうございます。

お暇な時間であろうと、大切な時間であろうと、私の小説のために時間を割いて読んで頂き本当に嬉しく思います。

大変、身勝手な事なのですが土日は小説を書くことが出来ず更新も出来ません。この場をお借りし深くお詫び申し上げます。

その分平日は頑張って更新していきたいと思っています。

皆様からのご意見、ご感想、ご指摘を辛口でも構いませんので是非お聞かせください。

感想は皆から見えるから嫌だと言う方は、私宛へのメッセージでも構いません。

皆様が画面越しに泣き、笑い、そして感動できる様な、小説を書いていきたいと思っています。

今後とも宜しくお願い致します。

『僕の女神を求め…』

後日：俺は早速美咲さんを僕らのヒーラーを勤めてもらうべくお誘いを申し入れる事にした。そう、The Continuance Of Dreamというゲームと一緒にしませんか！？と言うお誘いだ。

皆さんはどうかしらんが、俺は今までの人生でゲームと一緒にしませんかと女の子を誘った事が無く、どう声をかければ良いのか迷っていた。

【美咲さん！！子豚の家と一緒にゲームしません！？長編RPGっすよ！！！！】…苦笑され可愛い声で【遠慮します（汗）】と言われるに違いない…

じゃあこれか！？【美咲さん！！今子豚の家で勉強会してるんですけど、美咲さんも一緒にどうっすか！？】…これなら来てくれそうだが、勉強が終わり次第帰宅も考えられるな…

ココは単刀直入に…【美咲さん、僕達…いえ、僕の傷を癒してくれる女神になってもえませんか！？】…【ええ、勿論 私はいつだって高貴君の女神ですわ】…ぐふふふ でへへへへ もしコレがOKなら…『つて言えるかあ！！！！！！変体が俺は…』

『十分変体だと思いますよ…』

『こ…子豚…変体とは失敬な！！！』

『ですけど、教室の角で…ニヤニヤしたと思ったら陰しい表情になったり…ブツブツと呪文でも唱えていたんですか！？！？』

『うつ…』どうやら俺が美咲さんへのアプローチを考えている姿を見られてしまっていたらしい…よりによって子豚に…

『ほら…皆も引いてますよ…』

『なに！…！？』…教室を見回すと女の子グループがこちらを見てクスクスと笑っているでは無いか…一人一人の顔を繊細にチェックし美咲さんではない事と美咲さんのお友達さんでは無い事を確認し、ほっと一安心した。

『この調子ですとまだ美咲さんを誘えてないんですね…』…『うるへーほっとけ…』

『高貴君に任せていたらあのゲームが一生できない気がしてきましたよ…』…『グサ…ソツそんな事…みなまで言わないでくれ…』

『まあ安心して下さい、美咲さんなら僕が先ほど誘っておきました…』…『そうか…って…え！？！？』…『こいつは何を言っているのだ！？！』

『だから、美咲さんはもう僕が誘ったので高貴君が誘う必要は無いと言ったんですよ。』

なに…！！…こやつ…！！…できる…！！…じゃなくて…美咲さんを誘っただと…！？…何でこいつは後先考えず行動してしまうんだ…！！…断られたらと言う事を少しは考えてくれよ…

大体こんなヲタクの教科書みたいな、なりの気色の悪い生命体にお誘いを受けてOKをする女性が何処に居るって言うんだ…おまけにゲームと一緒にしませんか！？！？…だぞ…！？

無い！！無い！！無い！！無い！！ありえない！！

俺はキリッつと子豚を睨めつけた。

『高貴君。聞こえてますよ…ブツブツブツとさつきから…気色の悪い生命体で悪かったですね…』

…『あ…いや…その…いきなりゲームを誘ったりしたら気持ち悪いって思われるかもしれないな…ってさ！！…子豚は俺の大切なダチだし子豚が嫌われるのは俺も辛いんだよ…』…俺と子豚…どっちが気色の悪い生命体なのかわかりやしないな…

『そんな心配結構です！！…それにさっきの言い方はそう言う風に聞こえませんでした…が…まあ良いでしょう。ちなみに美咲さんはOKしてくれましたので、今日の学校が終わったら3人で僕の家で遊ぶ事にしておきました。』

『へ？？？』…予想外の展開に思わず変な裏声を出してしまった。

『だからあ…今日の放課後に…』

『マジか！！！！？』

『何がです？？？…』

『だから、マジで美咲さんはOKしたのか！？』

『マジです。ちゃんと聞こえてるんじゃないですか…』

『ホントにホントか！？！？』

『本当に本当です。』

『ホントにホントにホントか？？？』

『本当に本当に…ってクドイ！！！！！！』

『うつしや！！！！』…ああ…何故神はこうも僕の味方をしてくれるのですか？？？…まさか偉大なるゴッド様も僕の恋の応援を？？？

…ありがとうございます。貴方様のご期待に応えるべく日々精進します。

『あ…言い忘れましたが、流石にテストが近いのでずっとゲームして遊ぶとわけにはいかないようです。』

『ン?!…どうゆう事だ?!?!?』…子豚は俺の妄想ワールドを打ち砕いて話かけてきた。

『高貴君は僕と美咲さんの勉強を見て、そのあと遊ぶのです!!』

『まあ良いが…一つ質問して良いか???』…『ええ、どうぞ。』

『美咲さんは大歓迎だが、何故俺はお前の勉強まで見なきゃなんのだ???』…『あ…そうですね、高貴君にとって僕を教える必要は全くありませんよね。じゃあ僕一人で勉強しますので、美咲さんには先ほどの誘いをキャンセルしてきます。』

『子豚ちゃああん　そういう意味で言ったんじゃないでしょ　子豚は賢いから俺が勉強を見る必要があるのかしら!?!?とってたただけですよ!?!?』…『そ…そうだったんですか…僕はてつきり邪魔者扱いされているのかと…』…子豚は賢いと言う言葉に敏感に反応し、照れくさそうに謝罪した。

つけ。御名答だったんだがな。こんな事で美咲さんとの勉強会及びゲームデートをおじゃんにされてたまるか…差し詰めこいつには好きな子が居るようだし、俺が美咲さんに好意を持っている事も知っている、流石にYK…おっとコレはソロソロ古いな…空気が読めなさ過ぎるこいつでも俺と美咲さんの邪魔だけはしないだろう…

子豚とThe Continuanace Of Dreamってどんな感じのゲームなんだろうな???と想像に身を任せて話してい

ると「キーンツコーンカーンコーン」メンドクサイ授業が開始した。よりによって数学だ…いや、こりや算数だ。

今日の授業の内容は三角形の面積の求め方…こんなくだらない事より、【三角関係の恋愛の解き方】をおしえてほしいね。

しかしまあ、くだらないとはいえ男女共同授業…一生懸命勉強してらっしゃる美咲さんを誰にもじゃまされず見学できるのは、俺にとって幸せな時間の一つだった。

彼女にとってはそんなに難しい問題なのか、たまに悩んで頭を掻く仕草がたまらなく美しい。

こうやって長時間にわたって見つめていると…ほら。向こうも俺の視線に気付いて俺の方を振り返る。俺はニツコリ笑って手を振った。

高貴！！！！高貴よ！！！！…俺の中の善良な高貴が俺に話しかけてきた。

手を振ったじゃねえよ。完全にストーキング行為ではないか…変体を通り越してこれは犯罪だぞ。

お前が…いや俺が…いやお前か？…いや俺だろ。まあどっちでも良い、高貴と言う人間が美咲さんの事を好きな事は俺自身自分の事のように分かるが、このままだと嫌われてしまうぞ。ジロジロと見られて気分の良い子なんてそうそう居ないのだからな。

あ…あぶない。俺は善良な俺の意見を聞かなかったら危なく犯罪者になる所だった…

こうして、くだらない授業をくだらない妄想によって終業を向かえるのはいつもの事だった。

授業が終わると子豚がこっちに来た。

『また授業中、美咲さんを見てたでしょ…全く…』…っけ、バレ

バレか…っってお前は授業中にも俺の方を見てたのか！！？…気持ちが悪く体中に寒気が走った。

『ああ。気をつけるよ…お前も俺の観察してる暇があったら勉強しろよな…』

『しッ失敬な！！僕にはそんな趣味ありません！！たまたまチラツと見たら高貴君が美咲さんの方を見ながらニヤニヤとしてたので【友・達】として注意したまでです。』…『さよか…』

『ところでお前、良く美咲さんをゲームに誘えたな？？？…まさかお金を上げたりしてねえよな！？』

『はあ！？…あのですね。それは僕だけでなく美咲さんにも失礼ですよ。貴方が一番ご存知でしょうに、美咲さんがお金で動くような子でないと。』

『カタジケナ忝い…』…俺は子豚の発言に胸打たれ、愚かな自分を呪った。

『まあ誘うのは意外と簡単でしたよ。単純に僕と高貴君と美咲さんの三人でThe Continuanace Of DreamというRPGゲームと一緒にやりません！？…と率直に聞いただけです。』

『でも…それで良く断られなかったな。』

『ええ。まあ。実は…前に僕の家で美咲さんを含めて3人でお祝いをした日があったでしょ？？』…『うむ。』

『あの次の日に美咲さんから今度は3人でRPGをやってみたいと聞いたもので…それで昨日ゲームの説明を聞いている時に3人1組と聞いて美咲さんを誘ってあげようと思ったんですよ。』人差し指を立てながら名探偵が犯人を暴く時に様に子豚は自信ありげに言っ

た。

『ふん。って事は美咲さんもやりたがったのか…』

『まあ僕が思うに彼女は相当ゲーマー二ですよ。でもそれを隠してバレナイ用に生活している。まあ女の子がゲーマー二ってのは響きがあるまり宜しくないですからね…』…頷きながらとりあえずゲーマー二とはなんぞや??と俺は子豚に聞いた。

え!?そんな言葉も知らないんですか!?とまるで原始人でも見るかのような目…と言っても原始人を見ている人の目を見た事が無いからそんな事は言えんな。まあ子豚はかなり驚いて突っ込んできたわけだ。

ゲーマー二とはゲームマニアの事らしい。何となく言われれば分かるがどうしてゲーマー二では無いのだろうか…まあ要するに彼女はゲーマーと言うわけだ。これで要約、話が繋がった気がした。

俺は、まだかまだかと溜まりに溜まったストレスをを本能的に解消しようしているのか、震度1弱の貧乏揺すりをし、二時間目、三時間目、四時間目…昼食…とひたすら放課後の楽しみを待ちわびた。

そして、長い長い待ち時間に終止符を撃つ鐘の音。キンコンカインコンが鳴った。

『よっしゃ…!』

『The Continuance Of Dream』

『3人で遊ぶのなんて久しぶりだね』…放課後に真っ先に声をかけてきたのは美咲さんだった。

美咲さんの発言通り、俺達3人で遊ぶのは受験日以来、今日が2回目である。と言うより、俺と美咲さんが遊ぶのが2回目だ…

学校や帰り道とかでは話したりもするのだが、お誘いの言葉が中々かけられず結局今日まで…今日も子豚のお誘いか…そう言えば受験の時も…

と、まあ今日まで誘いたくても誘えないなんとも心苦しい状態が続いていた。俺はコレを機に是非美咲さんとの交友…いやいや、大恋愛を成就させるためにも絆を深めようと思う。

よし！ココは男らしくバッチリ決めてやるぜ！！

【おう！！言われてみれば久しぶりだな…でも、俺は久しぶりだ何て言われるまで気がつかなかったな…】俺

【えッ???どうして!??学校で毎日の様に会ってるから???】

美咲さん

【ツチツチツチー！確かに、それは無いとは言えない…けど俺にはもつと明確な理由があるんだよ。】俺

【え???…】美咲さん

【それはな…美咲さんが俺の心に居続けたからだよ。】俺。（ココで美咲さんの胸に向かって手で作ったピストルをドキュン…！と言いながら打ち抜く仕草を取り入れる。）

【ポッ…高貴…君…】美咲さん

俺に気持ちを打ち抜かれた美咲さんがヨロヨロと俺の方に来るのを

優しく受け止める。

この美咲さんを受け止める時はポイントがある。左手を自分の胸の高さに優しく羽毛の様に、右手を自分の腰の高さに硬く筋肉を張り巡らせて…その状態で受け止める事によって、倒れ際にお姫様抱っこへと持ち込めるのである

お姫様抱っこにメロリンラブな美咲さんは俺の潤んだ瞳に耐え切れず目を閉じる…そうになったらもうコンボ完成だ!!!そのまま自分の顔を美咲さんの方へと…

ぶちゅー!!!ぐふふふ うしゃしゃしゃ そんな…そんな事な
つちゃったら…あーもお俺…どおしちやおうかな…

ハッ!!!!!!何を考えてるんだ俺は!!!!!!冷静になれ冷静に…スーハーアア。

『そ、そうだね。所で美咲さんはゲームとかやった事あるの!?!?』
…んー。イマイチな気もするが、今の俺にはこの発言が限界だった。

『あんまり自慢になんないけど…結構得意だよ B B Qとか F L とかもやった事あるしね。』… B B Qとは決してばーベQの事ではない。ボスボーイズクエストと言うこっちの時代で人気の R P G だ。 F L と言うのはファンダジーロードとか言うコレマタこっちの時代で大人気の R P G だ。

『へへ。そうなんだ。もしかしてゲーム好きなの!?!?』…これは聞いても良い範囲だよな??

『うん。私、弟居るから一緒にやったりするの。女友達どうしでやったりはしないけど…好きだよッ。』…好きだよ…好きだよ…好きだよ…好きだよ…不覚にもかなりドキッとしてしまった(汗)

。『そつかあ。よかったあ。いやね、子豚と話しててさ、美咲さんが嫌だったら出来ないねって。』

え???と不思議そうな顔をしている美咲さんをすばやく感知し、俺はこれから行うゲームの説明をオペレーターから聞いた事なるべく詳しく話してあげた。

『…すごい。それって事はゲームのキャラクターになるのは自分自身って事なの!?』…

『うんうん そゆこと!!面白そうでしょ!?俺と子豚は一回ゲーム内に入ってみたけど幻想的で綺麗な世界だったよ』

俺は、見たままを美咲さんに話した。鐘の様な電灯や、光道…まだゲームを実際に始めたわけではないからあんまりしゃばって話せないのだが…

『うああ。いいなあ 本当に楽しみになってきた。子豚君からはそうゆう事聞いてなくて、RPGと一緒にやらない???って言われただけだったから。あのゲーム機でやるんだから結構凄いだろうなって思ってたけど…そんなに凄いだなんて…』

『でしょ 俺もびつくりしたよ。』…初めはガチガチに緊張していたが会話を弾ませるにつれて自然と話せるようになってくるのが感じられた。

『おまたせえ。ごめんごめん。』と遅れて俺達の所に来たのは子豚だった。子豚は今日、当番らしく放課後に色々と授業のまとめやクラスの状況を先生に報告に行っていたのだ。

3人が揃ったと言う事で、俺達は子豚の家へと向かった。

この日もレンガ色の夕日がまぶしく、少々風があり、あの受験日のプレイかと思った。

『（お邪魔します）』と美咲さんと二人で挨拶し、子豚の家へと上がらせてもらった。俺と美咲さんは子豚の部屋へと足を進め、子豚は俺達に出してくれる飲み物を入れにリビングへと向かった。

『じゃあ、先に準備でもしとこか。』

『そうだね』

俺達が準備をしていると、子豚もジュースを持って部屋に来た。『ありがと』を三人が綺麗にそろって言い、とうとうThe Continuanace Of Dreamを開始した。

吸い込まれる様なこの感じが俺は結構好きだった。何と表現すれば分かりやすいだろうか…眠っている時にふわっと浮く様に感じる時がある…それに似た感じた。

目を開けるとそこはもう別世界なのだから凄く不思議だ。第三者としてゲームをやっている人を見た事が無いだけに本当に実態が別世界に飛ばされている様に思える。

俺と子豚にとっては昨日今日で流石にあまり驚かなかったが、それでも『やっぱり綺麗だなあ』とついつい声を漏らしてしまった。美咲さんにいたっては、小さい子がショーウィンドウ中のおもちゃに釘づけになっている様に目を丸くし口をポカンとあけて、360

度満遍なく何度も見回していた。

『ほ…本当に綺麗…凄い…この世のものとは思えないね…』…と美咲さんが感動していると『そりゃこの世のものじゃないからねへ』…と子豚が余計な事を言い美咲さんのムードをぶち壊した。心なしかちよつと美咲さんがムツとしたような表情をしたことには驚いた…美咲さんも怒ったりするんだ…まあ当たり前か…

俺と子豚が前を歩き、それに続くような感じで美咲さんが俺達の後ろに付いてきた。

『ようこそThe Continuance Of Dreamの世界へ…お待ちしておりました。』…オペレーターだ。俺達が今日来る事が分かっていたかの様な口調だった。

『先日はどうも。』と俺も軽く挨拶した。NPCに向かって何やってるんだ…

『そちらのお嬢さんが最後のメンバーの一人ですね???』と聞くオペレーターに俺と子豚は『はいっ!』と応えた。

『新しい方も来てくださいましたので説明をもう一度最初から致します。』

…数分後…

『わかりました。おおよその事は高貴君に聞いていたので…』…美咲さんは俺の方を見てニツコリ笑った。

『それでは、コレよりThe Continuance Of Dreamの貴方達の最初の街【ウェルチ】へ転送いたします。宜しいでしょうか??』

『ちょっと質問してもいいですか??』と言ったのは美咲さんだった。

『はい。どうぞ。』

『ゲームの世界:The Continuance Of Dreamの世界で進む時間はどうなるのですか??』…』と言いますと????』

『この世界に一日居たら現実世界でも一日過ぎた事になるんですか??』…ああ。そう言われてみれば確かに気になる点だな…と俺も気になった。

『このゲームに居る間の時は勿論現実世界でも流れます。しかし、ゲーム内での時の流れと、現実世界での時の流れでは流れるスピードが違います。簡単に言いますと、こつちの世界で一時間居たとしても現実世界では精々10秒って所でしよう。』

『そうなんですか』と美咲さんは少し安心したように胸を押さえて一息ついた。

『しかし、注意してもらいたい事がございます。こちらの世界に居る間は当然プレイヤーの皆様も時の流れは感じられます。こちらの世界でも24時と言う時間があり、それに基づいて朝・昼・晩・と構成されております。こちらに一年間ずっと居たとしても、現実世界では一日ちよつとしか経ってないこととなります。このゲームと

現実世界でのラグタイムが大きく生じれば生じるほどに現実世界に戻った時の違和感が大きくなります。ですのであまりに長いプレイはオススメできません。』

『わ…分かりました。』…恐らく美咲さんも子豚も分かってないだろう。と思い、俺が正確に状況を把握する必要があった。

『その例えば、ゲームの世界で計10年居た場合。恐らく現実世界では11日くらいになると思うんですけど。その場合つてのは現実世界に戻った時に10年分の歳を取っていると思っていればいいですかね??』…美咲さんのした質問は以外に重要な事だと気づき俺だけでもしっかりと理解すべく質問をした。

『それは違います。その場合現実世界にもどつても11日しか経っておりません。精々極度の空腹状態になっていると思います。』

なるほどね…何となくだが理解できた気がした。

『そうですか。わかりました。結構危険なゲームですね。』と俺が言うとオペレーターは苦笑した。混乱する美咲さんと子豚にはあとでちゃんと説明してやるか…

少しオペレーターと会話し、俺達は『転送してください』と頼んだ。

『それではお気をつけて、The Continuance Of Dreamの世界を楽しんでください。…デュペル・イン・グリブ!!!』…オペレーターが魔法のような言葉を発すると、俺達の体は足から頭にかけて粉の様にゆっくりと消えだした。

『（（え!!!??）（（…何!?!?!?これ!?!?!?どうなっ

てんの！?!?..」

消えていく中、子豚は泣き喚き、美咲さんも声がでないほど驚いていた。そんな二人に冷静さを取り戻してもらったために「大丈夫！！大丈夫！！コレはゲームなんだから！！！」と声をかけ続けた。

寒いわけでもないのにカタカタと口が音を立てて危険信号を送ってきた。

正直、俺も泣き出したいほど怖く、「大丈夫」とかける声は振るえて逆に二人に恐怖感を与えてしまったかもしれない。…そしてとうとう俺達の体全てが消えた。

「…GAME…START…です…」

『ミリアの失態』

【暗い…ココは…どこだ…??】

【…ウエルチとか言う街に送られるはずじゃなかったのか??】

【かこの真っ暗な空間がオペレーターが言ってたウエルチとか言う街なのか??…】

【そういえば、子豚や美咲さんも居ないな…まさか3人で旅をするとか言っていたけど…RPGならではの仲間を探しながら旅をするのか??…】

【要するに…最初は一人??…】

気がつくと俺の足は地に付いておらず、フワフワとどこかの空間を彷徨っているようにも思えた。

何も見えない中頭がボーっとし、なにやら変な声が聞こえてきた…

【ん??…子供…か??…】

ゲームだからと言ってあまりなめてかからない方がいいよ…

ゲームの世界と言うのはゲームの世界での現実…つまりその世界に入り込んだ君にとってはもう一つの現実世界なんだから…

ビックバンと言う宇宙規模の大爆発によって作られた地球と言う名の星…神によって生み出された人間…

プログラムによって生成された、The Continuance Of Dreamという世界、プログラマーによって生み出されたゲームの人々…ゲームの人々にとっては僕達からみた只の人間は…神同然。創造者なのだから…

僕はとんでもない事に気がついてしまったの…かもしれないんだ…君達が無気なく過している日常…

そこには色々な疑問点があるんだ…

思っけても中々行動に移せない事。例えばダイエットなどをしようとして、今日から毎日走るぞ！！と思ひ硬く決意するが3日と続かないように…

その逆で、そんな事思っけてもいないのに気持ちとは反対の行動をとってしまふ事。気持ちではム力つくと思っけていてもその場は空気が状況、今後の付き合ひを想定し、笑っけて過ごしてしまふように…

君にも僕が言ひたい事が分かるだろ???…

この現実世界には君達にとつての現実と言ふ世界がある…さっきも言つたように当然ゲームの世界にはゲームの世界の中の人達にとつての現実世界が存在する…

僕達はゲームをする時にそれを操っけて遊んだりしている…僕達がゲームを止め、操る事をやめたらゲームの世界の人たちは自由になる…これっけて僕達にとつても言ひえることなのではないかな???…思ひもよらぬ行動…決意したのに中々行動に移せない…その自分の意思で動く事の出来ない時は僕が思ひに操られてる時間だと思ひんだ…俺達がゲームなどでそのキャラクターを操作するように、俺達自身も操作されてるのかもしれないんだよ…

君は何故こんな未来に来てるんだい???…君の意思???…違ひだろ???…恐らく君を操作する何者かがバグを発生させたか、何かやらかした…

僕の思考だとそうなる…反論できないだろ???…何故かを説明できないからね…

全てはループしてるんだよ…僕達がゲーム機という物を利用し操る人々の世界。恐らくそのゲームの中にも僕達には分からない手段を用ひて誰かを操っけてると思ひんだ…さらにその先もずっと…

何十…何百…何千…と言ひそれぞれの世界が綺麗に輪になるように操りあつてると僕が思ひんだ…とてつもなく大きな輪となつてね…

…そ…そ…それ…それじゃ…君がそのゲームに入つた事で君を操作する事になつた…オペミリ…とてつもなくおこつかな…

アハハハ…変な事言つちやつて混乱させちやつたかな…コレは悪魔

でも僕の思考だから深く考えないで…じゃあ宜しくね…

『うゝ ああああゝ！！！！！！』

『大丈夫です！？！？高貴君！！しっかりしてください！！』…子豚…？？

『高貴君！！私だよ！！分かる？？？美咲だよ！！いきなりどうしたの？？』…美咲…さん…

『あ…あれ…ココは？？？』

『ゲームの中だと思いますよ。』

『でも変だよ、街に送ってもらえるはずだったのに何処にも街何て無いし。』

周りは大草原だった。…360度何処をどうみても地平線…さっきの暗い場所はいつたい…それとあの子供は…何を言っていたんだ…？？？

『そんな事より、大丈夫？？僕と美咲さんが気がついたら高貴君、白目むいて凄いうなされてるんですもん…焦りませたよ…』

『うんうん…本当にびっくりしたよ…』

『ごめん…その…』…あれはじゃあ…夢だったのか…

聞こえてきた声があまりにリアルで俺にはとてもあれが夢だとは思えなかった。

ゲームの仕様で3人のうち誰か一人にああゆう悪趣味なイベントがあるのか？？と…一番自分自身の納得できる理由を付けて早いとこ忘れよう思った。

【それにしても…凄いうなされていたんだな…】…手は汗と砂でべったりとしていた。

二人に「ちよつと変な夢を見ていた」と告げ、心拍数が正常に戻るまで少し座って休ませて貰う事にした。

『無事…到着されたようですね。』…『（（え！！！！！！！！）（（…突然の声に3人とも周りを見回した。…が見えるのは爽快に空を走る鳥達だけだった。声の出元に一番最初に気がついたのは美咲さんだった。』

『声…こ…これからじゃない???』…と美咲さんの視線は俺の腕に付いているリングだった。

『な…なんじゃこりやああ！！!?』…決してボケたわけではない。俺は石原裕次郎の真似などしていない。とまあ例えボケたとしてもこの二人にこのネタが通じるはずもない…それに今はボケられる状況ではない。

『高貴君、こんなを着けてましたっけ???』…子豚が不思議そうに頭をかしげた。

『着けてねえよ…こんなもん!!!!』…

『皆さん、驚かせて申し訳ありません。私です。ミリアです。貴方達のオペレーター…』…そう言われてみると聞き覚えのある声だった。

どうやら彼女が説明し忘れたようで、プレイヤーの案内役として担当のオペレーターとの通信機であるリーディングリングと言うリングを3人のうちの誰かにつけるはずだったらしい…そうゆう大切な事を忘れるなよ…

『転送中に高貴さんにお付けしたので、高貴さんだけ変な空間へと飛ばされ…悪夢を見る形に…すいません…』…お前の仕業だったのか…絶対に許さん…

『それでは要点を言います。私は貴方達がゲームをリタイア、もしくはクリアするまで一緒に旅をする事になっております。要は貴方達の最後を見届ける役と言うわけです。』

『このリングで僕達の行動を把握するの??』

『そうと言えばそうですし、違うと言えば違います。』…ミリアは謎めいた事を言い出した。

『どうゆうことですか??』…すかさず美咲さんが聞くとミリアは…
『私は本来貴方達と共に行動するはずなのです、しかしそれはプレイヤーの方の判断に委ねられております。貴方達が私に出てきてほしくない。お前はリングに入って見学している…と鬼の様な事をおっしゃった場合にこのリングに封印され、このリングとして一緒に旅をする事になっております。しかし、貴方達が当然の様にリングから出てきて一緒に旅をしよう!!と言ってくれれば私は貴方達と共に旅をする事ができるのです。』

はあ…なんとまあしゃあしゃあと…お前の話方だと俺達が出してやらねば鬼扱い、出すのが当然。早く出しなさい。と言っているように聞こえてならん。

『そうなんですか…』

『で、出してくれます??』…実際に見なくても彼女が上目使いで最大限に可愛さをアピールしているのははっきりと分かった。…
勿論俺の応えは決まっていた。

『だーめだー!!!』・『是非!!!!』

何と…!!…見事に俺一人の意見と美咲さんと子豚の二人の意見が真

つ二つに割れたでは無いか…この場合完全に浮いているのは俺である…

二人から…氷の様に冷たい目が俺に向けられ、…さらに、本来感じるはずの無いリングの中からはもつと恐ろしい視線が…今にも視殺されそうな勢いだった。

『前言撤回いたします。』…と言わざるを得ない状況だった。

チャリツ！…！という音をだし、リングは割れ地面に落ちた。

黒と紫のいかにも怪しい煙がモワモワと渦を巻いてリングから沸き出てた。

『それでは…改めまして。ミリアと申します 宜しくね！』

俺はてっきり、最初のオペレーター案内室で見たあの女性が出てくるのかと思った。…子豚たちの表情から見ても二人とも俺と同じ気持ちを抱いているだろうに違う。…な…何だこいつは…って言うか、誰だお前！！…まさにコレだ。

声はさつきとなんら変わりなかったが、姿かたちがまるで違った。背丈は30〜40センチくらい…顔や服装は女性だったが、背中からは背丈程の白と黒の羽が生えており、空を飛んでいた。

そう、ゲームや漫画に出てくる小悪魔みたいななりをしていた…耳がネコ耳なのは少々俺を萌えさせた。すまん、忘れてくれ。

男からだけでなく女から見ても超キュートな姿で登場し、俺達に自己紹介を申し込んだ。

『本名はナチャ・ミリア。デーモン種の年齢19歳。性別は女性。血液型はB - 3 A型。』…19歳！？！？俺より年上かよ…B - 3 Aって何だよ…それにデーモン種ってやっぱりお前悪魔じゃねーか。

…

『短い付き合いになるか、長い付き合いになるかは貴方達次第です』

『ミリアさん、私より年上なんだあ　こちらこそ宜しくね　』

宜しくね　って美咲さあん…俺は今すぐ付き合いを終わらせていた
だきたい。さあ、良い子だからリングへとお戻り。

俺の考えを見透かしたかのようにミリアの方に来て耳打ちした。

『てめえの考えてる事は分かってんだよ！！調子こいてるとくつ
ちまうぞ餓鬼が！！！！』…す…すいません。生まれて初めて失禁^{シッキン}
してしまうかとおもった。

『あたしが一番年上だけど、あんまり気にしなくて良いよ　それと
ミリアって呼んで　皆で楽しい旅にしようねッ　』…なんだこいつ
…さっきの口調とまるで違う…

『（（はあい）（）』…子豚と美咲さんは嬉しそうに返事をした。

ミリアは返事をしていない俺に『楽しい旅にしようネ　！！！！』
とネコを怒らせた様な目つきで俺をみて応答を待っていた…『ウイ
…』…俺には選択の余地が無かった…

結局俺は本意的にオペレーターのミリアと一緒に旅をする事にな
ったのだった。

『それではあああ、始まりの街【ウェルチ】へ向かってえええええ
いざ出発！！！！』

『（（おお）（）』…『おう…』

『First city:ウエルチ』

俺はTVゲームでRPGをやる時は街に着くたびに即宿屋で休憩してやろうと思った。たとえば、HPが満タンでMPが満タンであつても…

『僕…もおクタクタです…本当に動けません。』

『俺も…マジで疲れた…』

『私も少し休憩させて欲しいです…』

日が照りつけ、天然サウナの草原を歩く事…約2時間…無事に…いや、コレは決して無事ではないな…瀕死の状態が始まりの街「ウエルチ」へと着いた。

最初の街に行くのに瀕死状態って…おかしいでしょ…

え！？魔物に襲われたのかって？？？…ツチツチツチ！ノンノン。

2時間も無防備な状態で時には歌を歌ったりしながら歩いてきたのだが、魔物には出くわさなかったのだ。…俺達が瀕死状態になつてゐるのには他の理由があるのだ。…完全なる体力不足だ（爆）

『全く…あんた達なっさけないねえ…私より若いんだからこんな事でへばつてんじゃないの！！』…俺達のが若いって言つてもそんなにかわんねえだろ…

『特に！！、高貴と新輔。あんたら男だろ？！？美咲はともかく…ホントに情けない…』…これ以上体力を消費したくなかつたのか、はたまた凶星だからなのか、俺も子豚も全く言い返すことは無かつた。

『はあ…まあ良いわ。とりあえず宿屋に言つて休憩しましょう。次

の街まではウエルチまでに来る距離の倍はあるからね。少しの間ここで体力作りだわね。』

『はあい…』 『はい』 『ういい』

俺達はウエルチの宿屋、【マルコ】で休憩することになった。…と言っても音楽が流れたら一日経っているなんて事はない。

ミリアが言うには宿屋に泊まって直ぐに朝になると言う現象は、次の日の朝が来るまでキャラクターはプレイヤーから開放され、自由の時間になるそうだ。…今の俺達にプレイヤーなんているのか??? そう言えば…悪夢の時、僕が君のプレイヤーとなる…とか誰かが言っていた気がしたな…でもあればミリアのミスで起こったバグだしな…まあ良いか。

『さーて そろそろ休憩終わって、このゲームの説明に入ろうかしら』 …休憩終了ってまだ30分も経ってないんですけど…

『説明ってココに来る前に色々聞きましたけど??』 …子豚の言う通り!!俺と子豚はその説明とやらを2回も聞いたのだ。

『うむ。このゲームのルールくらいは大体あんたに教えてもらって理解してるつもりだが??』

『フンツ。あんた達に教えたのは基礎中の基礎。言わばゲームのコントローラーの持ち方にすぎないのよ。私がこれから教えるのはこの世界での仕様よ。』

『ふん。』 …

『それじゃあ一度しか言わないからしっかり聞いてね!!』 …何かこんなガキみたいな姿のやつに偉そうにされると腹が立つな…俺が未熟なのか…

『まずね…』とミリアは以外にも分かりやすく説明してくれた。：

様はRPGの基本であるステータスに関係する事だ。ステータスと言うのは能力みたいなものだ。

The Continuance Of Dreamの世界ではL^{ベル}vと言うキャラクターのランク見たいなはないらしい。：LvUPの際には体が光ったりするのかな　と密かにドキドキしていた俺の夢は消えたと言うわけだ。

じゃあどうやって強くなっていくか…超簡単に説明すると行く街ごとにランクUPすると思ってくれば良い。

例えば、大草原　ウエルチと俺達は無事に一つ目の町に着いたわけだ。その間歩いた体力は己の基礎体力に影響され、プレイヤー自身の体が鍛えられると言うわけだ。…要するにゲームを終了し、現実に戻ったら子豚が痩せているかもしれないというわけ。

その基礎体力とは別に街ボーナスという物が存在するらしい、各街にはスキルSHOPという店が存在している。そのスキルSHOPで能力UPをするというわけだ。

体力（HP）、精神（MP）、攻撃（AT）、防御（DE）、回避（SP）、…とまあ大体10種類くらいの分野がある。スキルSHOPには測定機がおりてあり、各々の能力が今どれくらいなのかを測定できるという。

そして定番といっちゃ定番だが、この世界にも職業^{ジョブ}が存在している、それは最初にたどり着いた街、俺達の場合は【ウエルチ】で登録をしないと勝手に決められてしまうらしい。

『それじゃあ、とりあえず皆にやってみたい職業を聞くからこの中

から選んでね』とミリアはジョブ表みたいなものを出し俺たちに
見せてきた。

『それじゃあ、お互いがお互いに気を使わないように、皆せえの
一斉に言いましょ』と子豚が張り切り皆一斉に言う事になった。

『せえの！！』

『魔法使い』『魔法使い』『聖職者』

『…』

そう、俺達の中には前衛職が居ない…そりゃそうなるわな…ゲーム
のキャラクターならともかく、自分が盾になるなんて断固拒否だ。
…美咲さんの盾にならいくらでも…っと思ったり思わなかったり。
ここで話を説明に戻そう。それぞれの職業にあう能力をドンドン上
げていくとスキルSHOPの店員からスキル（魔法や特技）を覚え
れる本がもらえるらしい。

まあその本を読んで覚える…なんてメンドクサイ事は無くその本を
担当オペレータに渡し、オペレータがスキルを習得する呪文のよう
なものを唱えると、その後から使えるようになるというわけだ。
…俺の手から炎がでるのも時間の問題だな

RPGで欠かせないのが敵だ。^{モンスター}俺の考えでは街に向かうために敵を
倒しながら行くものだと思っていたが、まるで違っていた。

そもそもモンスターなどとはめったに遭遇しないらしい。…じゃあ
単純に最後の街をめざしてひたすら進めば良いのか？…それも違
っていた。

俺達の敵と言うのは他プレイヤーチーム、NPCチームの事らしい。

…街に向かう途中に発見した相手と戦わなければならないと言う。
お互いが望む望まない関係なく、各々に着いているオペレーターが
発見し次第、即戦闘となる。

そして、敗者は前回の街に戻されると言うわけだ。…何だかスゴ
クのようなゲームに思えてきた。…このゲーム…楽しいのか？…
それをいっちゃいかな。

『とまあ、今日はこころにしくよ！！』

『え！？戦闘ってどうやってするかとか、呪文を覚えた時にどう使
うかとかまだ知りたい事が山ほどあるんだけど…』

『まあ…あんたはこの二人に比べて賢いようだし、まだまだ覚えれ
るかもしれないけど、美咲と新輔はもう限界みたいだよ。』…ミ
リアに言われ二人を見ると、正に昔の名曲の歌詞にもあった「思考
回路はショート寸前」って感じだった。

『あ…そっか。なら仕方ないな。』

『（（ごめん…））』と子豚と美咲さんに謝られ、何だか二人に悪
気がした。

『まっ、チームワークって言うのはすごい大切だからさ。今のう
ちから相手のために我慢する事には慣れといたほうが良いよ』と
ミリアは楽しそうに笑っていた。

話もひと段落ついたということで、俺達は『ソロソロ終了して現実
に戻るよ』とミリアに告げた。

『え？？…』っとミリアは世界が滅んでしまったかの様に…と言っ
ても分かりにくいな、恋人に振られた時の様に青ざめて、さっきま
での楽しそうな雰囲気が一転した。

『えってなあ。俺達だって明日は学校あるんだし、ソロソロ戻らないと…』

『私もソロソロ家に戻らないと…テスト勉強もあるし…』

『また暇な時に来ますから』と子豚は笑って言ったが、この言葉にミリアは涙を流した。

『おっおい!!いきなりどうしたんだ??』

『ミリアちゃん…大丈夫??』

『え???ば…僕のせいですか???ミリアさんすみません!!!』と流石に皆心配した。…あのミリアが涙を流したのだから。

当然の事だが、ミリアは俺達の世界には来れない。俺達が再び来るまでミリアはウェルチ（最後に別れた場所）で待っているとの事だ。俺達がいつ来るかも分からないのに…

彼女が待っている期間というのは、俺達が再びゲームを再開するまで、もしくはゲームをやめると宣言するまで…の二通りしかない。まあ当然の事だが、ゲームをやめると宣言せずに永遠に来ないプレイヤーも居ると思う。…むしろそっちの方が多いかもしいない。

そんな感じで、永遠に待たされる事となったオペレーターは、ある期間が来るとゲーム内で自然と消滅し、消えてしまいうらしいのだ。…流石の俺もミリアからこの話を聞いた時は同情を抱いた。

『そうなんですか…』 『そうなんだ…』 『ふん…』 …俺達はミリアに返す言葉が見つからなかった。

『ごめん…オペレータの私がこんなじゃだめだよね…』 っと最後に俺達に謝罪し、俺達の意見も聞かずに帰還の魔法を唱えた。『インペリアル・リバーズ…』

『おッおい!! までって… また直ぐ来るから、待ってるよ!!…』
と俺らしからぬ後で振り返ると恥ずかしくなってしまうような言葉をかけ俺達はミリアの前から消えた。

俺の言葉がギリギリ聞こえたらしくミリアは本当に嬉しそうに笑った。

『ありが……』

気がついたら子豚の部屋にいた。

『First city: ウェルチ』（後書き）

御閲覧本当にありがとうございます。

今週は先週に比べて閲覧者が増え、私は感動しております。

大変、身勝手な事なのですが土日は小説を書くことが出来ず更新も出来ません。この場をお借りし深くお詫び申し上げます。

皆様からのご意見、ご感想、ご指摘を辛口でも構いませんので是非お聞かせください。

最近は寒くなってきましたので風邪などには十分注意してください。今後も一生懸命頑張りますので応援宜しくお願い致します。

追伸：明日（2008年12月6日）で22歳となります 一人バースデー ヤッホイ ……

『センチメンタル』

ゲームの世界から現実世界へ戻ってきてから1時間くらいは凄いい脱力感に襲われ、3人とも無言で子豚のベットにもたれかかっていた。俺、個人の意見を言うところ『またやりたいな…』とは正直思わなかった。…恐らく俺以外の二人も同じ意見ではないのかな…

ため息だけの沈黙がずっと続いていたら最初に声を発したのは子豚だった『そ…それにしても疲れましたね…』。

『何だか…フルマラソンを完走した気分ですよ…』…『ってお前はフルマラソンどころか10キロマラソンすら完走した事が無いだろう…』

『私も…正直ゲームが終わった後にこんなに疲れるなんて思ってたな。』…『女の美咲さんや、デブってる子豚は俺以上に疲れただろうな…』

『そうっすね…』

『あの…次ぎやるのがあんまり気が進まないのは僕だけでしょうか…？』…『子豚の意見に俺も美咲さんも何にも応えなかった。』

ゲームを出る時はミリアに『また、直ぐに戻るから』…『って言った。正直その時は美咲さんや子豚さえよければ明日にでも来る気で居た。…が予想外もしないゲームの副作用が俺たちを襲ったのだ。…ゲームに慣れてない子が長時間ゲームをして頭痛が少々…』…『って言うみたいで俺たちの慣れの問題だと思われる。』

子豚への返事を俺が考えていると美咲さんが『私も…少しの間はや

らないかも…』と、とうとう本音を語りだした。

美咲さんに便乗するように子豚も、『だよねえ…こんなに疲れるなんて…』と子豚と美咲さんでゲームの欠点を言いまくった。

俺はと言うと、無言に二人の愚痴を聞き入っていた。…子豚や美咲さんの言う事も十分分かる…が俺はミリアとした約束が気になっていた。

ゲーム上のミリアの事に対して考えている俺がおかしいのかもしれないが、正直二人が無責任に感じてならなかった。

…結局この日はテスト勉強をせず、解散した。

『ただいまあ…』

『おう！！お帰り！今日も遅かったな？？友達の家にでも行つてたのか？？』

『ああ、うん。』

『もう直ぐテストだろ？？？俺より賢いお前に勉強しろって言つのは何だか不思議な気分だが…少しくらい勉強しとけよ！！』…『へえいへい。』

受験日…

子豚の家から帰宅し俺は隆二さんにエルピネス学院に合格したと言う事を報告した。…正直このときは隆二さんにはめられ、かなりレベルの低い高校を受験させられたのだと思った。

『隆二さん！！遅くなってすみません…友達の家に行って…』

『ハハハハ 俺も受験に失敗した日は一緒に落ちた連中と自棄酒で盛り上がったもんだよ…今は警官だし、未成年のお前に飲酒をして良いとは言えんがまあ、今日くらいは仕方ないな。あんなにレベルの高い高校じゃなくても俺はお前に普通の高校に行ってもらって大切な友達を作ってもらって…楽しく生活してくればそれで良いんだ。あんまり落ちた事をきにするな！！…なッ！！』
隆二さんは俺が帰るまでも間に俺を励ますスピーチでも考えてたかのようにダラダラと俺の合否も聞かずいきなり話し出した。

『あ…あの…俺…受かったんっすよ…』

『うんうん。そんなお前の口から聞かなくてもわかってるよ、当たって砕けろって言うてたろ！！だからあんまり気にするなッ！！』
…と全然俺の言葉が耳に入っていない様子…

『だあかあらあ…エルピネス学院に合格したんですって！！！！』

『……高貴…俺は、お前が落ちても怒ったりしないぞ！！…でもな…嘘だけは辞めてくれ。俺に言いづらいかも知れんが、正直に言ってくれよ…俺はお前の兄貴みたなもんなんだからさ…俺には何でも話せるようになってくれよ…』…そ、そんな悲しそうに言われても…俺マジで受かったんだけどな…

『隆二さん…本当の事を言うんで信じてくださいよ??』

『おう！。絶対に本当の事を言えよ！！』…はあ…不合格しました。の方が信じられるって…俺ってそんなに頭悪そうかな…??

『合格しました。』

『…』

『合格です。』

『…』

『…』

『…』

『隆二さん！？』

『ほ…本…嘘じゃないよな？！？』

『ええ！！』…俺は女にすらした事のないウインクを男に対してしてしまった。パチツ！！

俺の報告を受けたあとの隆二さんは完全に壊れていた。

もう深夜だと言うのに…近所の人、会社の人、知り合い全てにTEL、メールで俺の合格を報告しまくったのだ。

翌日も隆二さんは会社ではしゃいでいたらしく、隆二さんの上司にこつ酷く叱られたそうだ。。叱られてもなお、『良かった。良かった。本当に良かった。』とはしゃいでいた。

隆二さんが俺を大切に思ってくれているのが本当に実感できた。…そして俺自身、隆二さんの事が好きだと言う事も実感できた。

【なつつかしいなあ…すっかり俺もこっちの世界に馴染んじまったな】

義兄弟二人であんなに盛り上がったあの日からもう結構経った。…今ではあんなに高い受験費を出してもらってまで行く価値のある高校だったのだろうか…と疑問に感じる時が多々ある。

学校には毎日休む事無く通っている。…しかし、俺がまともに参加している授業といたらチーム授業という、5人1組でやらなくてはいけない授業だけだ…それ以外は大抵寝て過している。

『ねえ…隆二さん…』…考え事しても始まらないと思い隆二さんに相談する事にした。

『ん??』…隆二さんは家での仕事を中断し、俺の方に来てくれた。『高い金出してもらって受験させてもらったのに、こんな事言うのは非常識だと思っただけだ』あの学校って本当に行く意味あるのかな??』…俺は隆二さんの顔が見れず、俯きながら話した。

『…どうかしたのか??』…連れが出来ないとか、勉強がつまらないとか…』…口調的に、怒っている様にも、心配している様にも感じられた。俺は俯いたまま後者だと応えた。

『…勉強なんて物は楽しい物じゃないぞ??』…高校変えても、社会にでも、勉強という物は付きまとうてくる。それに共通して言える事は勉強なんて殆どが楽しい物じゃない…』…隆二さんは弟である俺に社会の先輩として教えてくれている様にも話したが、俺の言いたい事とは少々の外れの返答だった。

『うん。それは分かっているんだけどさ。授業でやっている内容が…その…どれも単純な事ばかりと言うか…わかっている事ばかりというか…』…あんな授業は俺の時代の小学生でもできる!!!と言いたかったが、俺は語尾を濁らせるだけだった。

隆二さんは少し考え込んで、『…じゃあ辞めて働くか??』と厳しい口調で言った。

『え!??』…予想外にしない返答に俺は伏せていた顔をあげて隆二さんを見た。…正直辞めたいなんて思ってもいなかっただけに、驚かされた。

『だってお前、行っても仕方ないって思っているんだろ?!?』……と顔を上げた俺を覗き込むように見つめてきた。

『いや…何のために行っているのかなって…思っただけ。辞めたいとかは思っていないし、明日からもちゃんと学校行くよ。…変な事聞いてごめん。』…いやはや全くだ。我ながら何を聞いてどんな返答を期待していたのだろう…俺は部屋に戻ろうと立ち上がった。

『おい。高貴！ちょっと待て。お前、あの学校に何を学びに行つて
るのか分からないって言ったよな。…お前があの学校を選んだ理由
を考えてみる。…魔法だろ！？』…魔法ねえ…

俺は初めて隆二さんを無視したように部屋に戻った。…隆二さんに
悪い事したなど、部屋についてから後悔した。

隆二さんが言ったとおり俺はエルピネス学院に【魔法の授業】があ
ると言う理由だけで決めた。今思うと、何故もつと冷静に考えな
かったのだろうと、自分の愚かさを考えさせられた。

俺は今日ゲームの世界でミリアに色々話を聞いた。呪文の覚え方
とかの話を聞いてゲームだなと感じた。

子豚の家から帰る途中に、ふと現実世界での魔法はどうゆうものだ
ろう…と考えた。

考え出して直ぐは色々な魔法の事を考えていた。火の魔法、風の魔
法、闇の魔法…それらを考えているうちに、一つの疑問が浮かび上
がった。

そう、俺はこの世界に来てまだ一度も魔法というものを見た事が無
いのだ。こつちの世界に来てソロソロ3ヶ月が経とうとしていたの
にだ。

さらに言つとエルピネス学院ですら魔法を使っている人を見た事が
ない…。

Why…おかしくないか？…

街で見かけないのは魔法を公で使う行為がダメだからかもしれない

…で納得した。

その直後に、なら学校では???…と思い、俺は最低最悪のパター
ンを思いついてしまった。

そもそも、俺の考えている魔法の勉強と学校側の魔法の勉強が全然
違う物だったかもしれないという事だ。

俺は勝手に魔法の勉強とは魔法が使えるようになる…と解釈してい
た。

実際は、魔法というのはこうゆう事なのですよ。と単純に本で魔法
について学ぶものかもしれない…と思ってしまったのだ。

『…ま、まさかな…へへッ』俺は自分の部屋の窓から羽樹の木へと
飛び移り星を数えながら色々考えた。…というより珍しくセンチメ
ンタルになっていた。

『翌日…』

結局俺は羽樹の木で眠ってしまっていたらしい。…真冬に外で寝たのに寒くないのだから時代の変化は素晴らしい。

俺は学校に着くなり職員室へと向かった。…職員室に入るのは受験日以来の2回目だ。クラスの当番になれば入る用事もあるのだが、もう2ヶ月以上経っているのに俺はまだ当番になっていない。

…受験日を振り返り俺はあの美しい先生と会えるのでは…と少々期待に胸膨らませていた。

『おはよッ』…と職員室に向かう途中に声を掛けられた。

俺はとつさに振り向いて『あ、おはようございますッ！』と丁寧に挨拶した。

な…俺に挨拶をしてくれたのはウル覚えの想像以上に美しかったあの時の先生だった。

…流石に以前より服装の慣れで下半身の暴走は免れたがやっぱり綺麗だ。いつみても美しいとは彼女のために出来た言葉なのかもしれないな。

『山岡君??だったよね??受験満点の…』…こ…山岡君!?
…ハイッ!!山岡です。覚えていてくれたんですね…僕は今非常に感動しております。

『もしもおおし。大丈夫!?、具合でも悪いの??』…ハッ。また悪い癖が出てしまった。妄想の世界ではしっかりと受け答えをしていたのだが、そうなると現実での受け答えをすっかり忘れてしまう。

『あ、いえ、質問がありました、職員室に向かっていた所です。』
『こんなに早朝から何か用でも??』

『その前に…先生って今おいくつですか??』…って俺は何聞いてんだ…恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ。

『え!?!、私??今23だけど…もしかして…そんな事を聞きに来たの??』…ととと、とんでもない、そんな失礼な事を聞くために来たわけではないツす。…でも、聞いて損はしてないかも…聞かぬは一生の恥っていいますしね 23歳ですか。大学卒業したばかりじゃないですか…。ってボケエツ”!!!

『いえ、若いんだろうなあって思ったので聞いただけです。えっと僕の用件は、2年生からの選択教科で学ぶ予定の魔学について質問したいんですが。…』…いっちゃ悪いが…こんな新人先生で分かるのかな…ルックスは200点満点だけど…

『ああ。魔学の事が知りたいの??…貴方まだ1年生でしょ??』
『はい…その…ちょっと気になった事がありました…このままでは夜も眠れぬ日々が続くと言いますか…だめツすかね??』

『アハハツ。まあ本当はいけないんだけど、夜も眠れないんじゃないや仕方ないね…えゝあゝ専門教科【魔学】の担当、樹里・宇野です。』
…『ほえ!?!』…思わず変な声を出してしまった。…樹里さんって言うんだ…

『まあ一年生の君が知らないのも無理ないね。私は専門教科【魔学】の担当なの 宜しくね 』…ズキン…つと正に昭和的ポーズ…いや平成だったかな??. チョキの人差し指と中指をくっつけた形の手を頭にあて、『宜しく 』と同時に20センチほど前にだした。
…まあそんな事はどうでも良い、樹里さん、いやいや、樹里先生は

【魔学】の担当の先生だった。

『ああ…そうなんですか、えっと単刀直入に聞きます。魔学って言うのは、魔法についての勉強なのか、それとも魔法を使えるようになるための勉強なのかを教えてください。』…この応え次第で俺はこの学校を去ろうと思う。

その時は…さらば子豚…そして美咲さん。…FOREVER…

『んー…』…そんなに考え込む質問ツすか？…それとただ俺を焦らしてるだけ？…樹里先生は綺麗な顎アゴに人差し指を当てて考えていた。

『んー。そうだねえ。両方ともかな。』…りよ、両方！？

『つと言いますと？？？』

『さっき山岡君が例として【魔法についての勉強】と【魔法使えるようになるための勉強】って二つ上げたけど、私の授業では両方ともやるかな。簡単に言つと筆記と実技かな…当然だけど、魔法つて言うものは呪文スベルを唱えるだけで実行にうつせるわけじゃないのね。まず、その魔法の本質を理解し、その上で呪文を唱えないと呪文が完璧に唱えられたとしても、魔法は発動しないのよ。分かるかな？？』

『はい。非常に分かりやすいです。』…とりあえず魔法とやらは勉強次第で使えれるようになる事が分かり、ほっと一安心した。

『だから、まず本質の理解のために筆記勉強。それと同時進行で実技の勉強。って感じかな。』

『なるほどお…』…俺は樹里先生の言った事を一言一句逃さず頭に叩き込んだ。

『でもね…必死に努力して本質も呪文も理解しても魔法が使えないケースがあるのよ…いいえ、使えないケースの方が多いと言った方が正しいかしらね。』

『え…??』…な、なんだそれ、必死こいて勉強しても、使えない可能性の高いのかよ…

『魔法を使う上で勉強をする事も大切だけど、一番重要なのはやっぱり個々の性質なのよ。…それで魔法を沢山使える子も居れば、人一倍勉強したのに魔法を一つも使えない子も居るの…』…恐らく今の先生の教え子にも頑張っているのに使えない子が居るのだろう…樹里先生はその生徒を思い出すように空を見上げ、若干悲しそうな表情をしていた。

『そうなんですか…』…俺は…使えるのかな。…そもそもこの時代の人間でない以上使えない可能性の方が非常に高い…

俺の時代から500年もたったこの時代でも使えない奴が居るくらいだ。

人間が魔法を使えるように500年と言う長い年月をかけて日に日に進化してきたのを俺はすっ飛ばして…タイムスリップと言う怪奇現象によって来たのだ。個人の性質なんてあるはずもない…

『まっ。山岡君ならきつと魔学の授業も完璧でしょうね 期待してるから専攻してね…それじゃあソロソロ、朝の会議があるから失礼しますね』…と樹里先生は職員室へと小走りで駆けて行った。

この学校を選択した理由である魔法を使えるようになるための勉強…コレ事態は的外れではなかった。俺が心配し考えていただけ無駄

だったと言つわけだ。

職員室に背を向け、俺は自分の教室に足を進めていた。…あ、樹里先生に簡単な魔法、見せてもらえば良かったな…

教室に着くと既に何人かの生徒が来ていた。…

【やあ！！皆おはよう！！】…なんて挨拶は俺はしない。と言うよりいつもは遅刻ギリギリで挨拶をしている余裕など無いただが…俺はいつも通りまっすぐに自分の席に向かった。

『山岡君おはよう！！今日は早いね。』…挨拶をされただけなのに【ドキッ】つとした。

俺も足を止め、振り返った。…もうこのクラスにも大分居るというのに声と名前と顔が一致しない…俺ってよっぽどクラスに打ち解けてねえんだな…

俺に声をかけてくれたのは恐らく…山下さんか、木下さんか、上田さんだ。…俺も過去の記憶を掘り返して3人にまで絞る事が出来た。…まあ上出来だな。

『ああ、おはよう！！今日、職員しつに用事があつて、それで早めに来たんよ。木下さんはいつもこんなに早いのか！？』…とっさに木下と言つてしまったが、あっているのか…

『ううん。いつもは山岡君のほんの少し前だよ。あたしも遅刻ギリギリだからさ。』…ちみが遅刻ギリギリなら、ちみより遅い俺は完全に遅刻ではないか…

『へえ、そうなんだ。俺が来た時には皆居るし…居ない奴は休みの子くらいだしね。ハハハ。…今日は何で早く来たの！？』

『昨日、彼氏の家に泊まってたから、おばさん達が起きる前に家を出てきたの。』…さよか。

『ほうほう。朝帰り登校というわけですね。木下さん、まだ16歳なのによりますなあ。』…って俺は親父か。

『そ、そんな、変な事してたわけじゃないもん！！テスト近いから一緒に勉強してたの！』…と、木下さんは少し頬を赤めて恥ずかしがりながら俺の発言を否定した。

流石にこれ以上からむと、ワイセツブッチンレッザイ猥褻物陳列罪…いや、陳列したわけではないし、この場合は公然猥褻罪コラゼンワイセツザイかもしれないな。…6ヶ月以下の懲役若しくは30万円以下の罰金に処せられてしまうではないか…。母性本能ならず、親父本能がくすぐられたが、木下さんへの質問はとりあえず中断し、夜の出来事は俺の妄想だけにおさえた。

少し木下さんのできる範囲で世間話をして居ると、廊下に美咲さんの姿が見えた。…ムムム。

『木下さん…ちょっと失礼。』…『え！？…う、うん。』…木下さんとの話を中断し、俺は美咲さんのもとへと向かった。…明らかに様子が変だったからだ。

廊下に出てくると、それはもう確信犯だった。…隣のクラスかその又隣のクラスか知らんが、俺たちのクラスの生徒ではない腐れ外道が、事も有るうに美咲さんにちょっかいを出していた。

【クオラアア！！！糞ガキヤー！！！美咲さんに何してくれとんじや！！！！】…何て言えたらカッコいいだろうな。…当然俺はそんな事は思いはしても言う事はできない。

『あッ。美咲さんじゃん！！どうしたの！？、知り合い？？』…まあ、あたかも偶然通りすがったように…これが今俺にできる最良の言葉だ。

『高貴君！…全然、知り合いじゃないよ…教室に入ろうとしたら、いきなり…』…はあ…やつぱり。俺の時代ですら学校で女子生徒にちよつかいだす奴なんて無かったのに…全く…

『い、いきなりはねえだろ！？、人聞きがわりいな。』…腐れ外道よ、お前が人聞きなど気にするんじゃない…そんな事を気にするのならこんなパブリックでのナンパは控えよ。

『ほうほう、と言う訳で美咲さんは嫌がっているみたいだし、君もソロソロ教室に戻ってはどうかね？』…フン。冷静に言っただぜ。

『あ？大体、何だてめえ。てめえには関係ねえだろ。お前が教室に戻れ。』

『んー。関係無い事ないんだけど…美咲さんは俺の、か…親友だしな。』…いつかきつと、美咲さんを彼女と呼べる日が来ます様に。『ハハハ。何だお前ただの親友かよ。彼氏でもねえくせにしゃっしやってくんじゃねえよ。』…ぐさーっ。高貴は深く傷ついた…つと同時にこんな一個下の餓鬼になめられてたまるか。と言う怒りが溢れ出してきた。

『おい。てめえ。いい加減にしろよ。美咲さん嫌がってんだろ。』…俺は奴の胸座を捻り掴んだ。…怒りのせい、か、恐怖のせい、か俺は全身で震えていた。

『新たな友人…??』

俺の人生初の喧嘩が今行われようとしていた。…美咲さんのためだ、悔いはねえ。

相手は不謹慎にも学校の廊下で美咲さんを口説こうとしたが失敗に終わり、それでも諦めずしつこく美咲さんに絡んでいた俺と同じ一年生だ。

学年は同じだが俺のほうが歳は一個上。…実際なら俺のほうが先輩。
【…ここで引いたら男が廃るッてえもんだ!!…花は桜、男は山岡、…男、山岡。美咲さんのためにいざ出陣】

でも…奴は俺の一個下とは思えないほど体格が良く、身長も175センチある俺よりも10センチくらい高く、体系も子豚が綺麗に引き締まった様になつちりした、何処からどうみてもレスラーだ。

【ええい!!弱音を吐くな。俺が奴を止めなきゃ、美咲さんは…】

『おら、どうした???せっかく胸座掴んだんだから投げ飛ばしてみろよ!!…』…っち。ゴリラめ…俺に数分考える時間をくれ、いや、数秒で良い。

俺は奴の期待通り投げ飛ばすなんて野蛮な事はせず、（できるはずもなく）できる限りの鋭い目で奴の目を睨めつけていた。

『クオラア!!!!お前ら、朝からなにしてるんじゃっあ!!!!まっつたお前か!!!!岡田あ!!!!!!』

廊下じゅう…いや、教室の中までも響き渡るほどの怒鳴り声に俺と腐れ外道の視線のぶつかり合いは一時中断され、声の主の方を見た。

『げ、…飯沼…』…先に叫んだ主を発見したのは奴だった。…どうやら叫び主は生徒指導の飯沼らしい…

飯沼は白髪のアールバックで、見た目だけでもかなりの威圧感のある鬼教師だ。体罰なんて朝飯前、時には逆らった生徒とタイマンだつてしたりするらしい。…こりゃ、最悪だ。

飯沼は俺たちの方へと一步一步、近づいてきた。飯沼が近づくにつれて聞こえるはずもない足音、ズシン！ズシン！という地響きが聞こえてくる気がした。

俺は岡田とやらの胸座から手を放し、飯沼が目の前に来る前に「気をつけ」の姿勢になっていた。…不思議な事に岡田も俺同様「気をつけ」の姿勢になっていた。…さらに言うなら美咲さんまでもが「気をつけ」の姿勢になっていた。

飯沼は止まることを知らないのか、俺たちと顔がひつつきそうになるまで近づいてきた。…その距離約15センチといったところだろう。…気持ち悪いので辞めて貰いたい。

…が、こんな状況で、『ちよ、ちよつと先生。近いッすよ！』おっさんに顔寄せられても気持ち悪いだけなんでもう少し離れていただけないでしょうか！？…なんて言おうものなら骨すら残らないだろう。…男のカンがそう言っていた。

当然、岡田とやらも「気をつけ」の姿勢でびくりとも動かなかった。…ちよつとした不良がヤクザに絡まれたみたい…

『岡田！…！お前、今度学校で騒いだらどうなるって言ったか覚え

とらんのか！！？』…飯沼の声はこの距離でも小さくなる事はなく、俺と岡田の顔に唾が満遍なく飛んできたしだいだ。

当然だが汚いなどと言えるはずもなく、ひたすら顔に掛かる唾と息に耐えながら聞くしかなかった。

『お騒がせしてすみません！！決して揉めていたわけではありません！！久しぶりに友人にあったものでついテンションがあがってしまいました。』…よくもまあこう口が回るもんだな。少々感心した。

俺や美咲さんにとっては正直に打ち明けた方が良さそうだが、流石にこんな先生に叱られると思うと敵ながら同情が芽生えてきた。

『私もすいませんでした…』と美咲さんが飯沼に謝った事で岡田に口裏を合わせてやる事が確定した。

仕方なく俺も頭を下げ、数分怒鳴られる事で開放された。

一悶着あったが、とりあえず美咲さんも無事なわけで、めでたしめでたしで教室に戻ろうとした。

『おい。』…声の主は岡田だ。…なんなんだ、こいつはまだ懲りてないのか…今度飯沼に見つかったら完全に現行犯になるのがわからないのかね…

『何か？』…と俺が足を止めると、美咲さんも立ち止まった。

『さつきはすまんかった！！飯沼に本当の事言つてればお前らは何事も無く開放されただろうに…まあお前らが俺に合わせてくれたおかげで俺の命は助かったわけだ…本当にすまんかった！！…』…とっさに俺は美咲さんを見てしまった。美咲さんも俺のほうを見て

目を丸くしていた。：俺も美咲さんみたいに驚いた表情をしていたのだろう。

美咲さんの目は俺に岡田に返事をしてくれ、と訴えているように見え：『気にするな！！昨日の敵は今日の友だ！！』と俺は親指を立てて言い放った。：いやー。見事にすべったけどね。

『こ、高貴君：』：美咲さんのクリクリと丸かった目は気持ちの悪い猿でも見るような細い眼に変わり、その反面、さっきまでギョッと矢印の様に閉じていた目は丸く開かれていた。

『昨日の敵は今日の友じゃなくて、さっきの敵は今の友だったな～ハハハハア：』：Why??：何故俺がこんな仕打ちを：

美咲さんは俺に預けていたカバンを奪い返す様に取り、一人で教室へと戻ってしまった。美咲さんもあんな顔するんだな：と知った時には時既に遅し：美咲さんははるか遠くの自分の席に着いてしまっていた。

『な：なんかすまんねえ。お前らが喧嘩する事ないのに：』：今ならこのレスラー岡田すらも瞬殺できるのではないかと感じた。

『うるせーほつとけ、お前には関係ねえ：言っておくが俺とお前は友達でも何でもねえからな：わかったらとつとと失せろ：。』：初めて朝早く学校に来たと思えば：本当にろくな事がない。

岡田は何を考えているのか、失せろと言っているのに全く失せる気配がなく、窓にもたれかかる俺の横に居座り続けた。：座っては居なかったが。

『あゝ。高貴君！！！！おやはつございます！！今日は早いんですね

「……どうかされたんですか?」……子豚だ。

「おお。子豚か。おはよ。今日は先生に聞きたい事があつたんで早くきたんよ。」

「へえ。そうなんですか……高貴君にも聞きたい事なんてあるんですね。」……子豚よ。この時代では天才児かもしれんが俺だつて一応人間だ疑問に感じ聞きたくなる事だつてあるさ。

「うむ。」

「ところで、お隣のでっかい人はお友達ですか!」……子豚は岡田を見上げながら言った。

「おう!……!」……岡田。

「違う!……!」……俺。

同時に真逆の応えをした事に子豚は混乱しだした。

「え?……?どうゆうことなんです!」……!」

「朝っぱらからこいつに絡まれて、悲惨な目にあつただけで、俺とこいつは友達でもなんでもない。」

「おう、高貴!……さつきは確かに世話になつたが、俺とダチになる事をそんなに嫌がらなくてもいいじゃねえか!」……お前に高貴と呼び捨てにされる覚えは無いがまあいい。

「ふむふむ。君は高貴君と友達になる事を希望しているのですね。」

……と子豚は楽しそうにクスクスと笑つて言った。

「あ……?……大体何だてめえは、ココは中学校でも、ブタ小屋でもねえぞ。とつととけえんな。」……子豚に笑われ少々キレ気味の岡田。

「し、失敬な。僕は中学生でも、ブタでもありません。名前は確かに子豚ですが、正真正銘、人間です。」

『おい、子豚、こんな奴に一々腹を立てるな。騒ぐと生徒指導の先生が来るだろ…』

『あゝそつだそつだ、いけねえ。騒ぐのはまずいな。』…子豚を見下ろしていた岡田も冷静さをとりもどし、定位置（俺の横）にもどった。

俺はあまり騒がぬように、子豚に今までの経緯を丁寧に説明し、子豚も大体の状況把握はできた。

『へえ…それは悲惨ですね…』

『だろ??…』

『でもまあ、岡田君は高貴君の友達になりたいみたいですし友達にしてあげたらどうです??…僕が聞いていて思った事は岡田君が友達になる事と美咲さんに嫌われた事は関係ないと思います。』…子豚の癖にきつぱりと言い切った。

『うぬ。豚の言う通りだな。俺とお前が振られた事には何の関係もない。』…岡田もいつの間にか打ち解けだし、腕を組みながら頷いていた。

『いいじゃないですか…岡田君が友達になつても…高貴君、言っちゃ悪いですけど友達、僕と美咲さん以外居ないでしょう??…グサツ!!!酷い…酷すぎる…あんまりだ…』

『な、んな事、ねえぞ。今日、あそこの山下さんと友達になつたしよあ。』

『…あの人は木下さんですよ…』

はあ…もう認めざるを得なかった。確かに俺はこの学校に入って付き合いと言いつき合いは何にもしていない。偶然受験が一緒になる子豚や美咲さんが居なかったら…そう思うと少しゾツとした。

『岡田…お前の名前は…』

『あ??…お前が先に名乗れよ。』…無理だ。俺はこいつとは絶対に上手く行かない。そう思う弱気心を押しつぶし、堪えた。

『俺は高貴。つてお前さっき呼んでただろうが。苗字は山岡だ。…お前は?』…なんか口に出して名前を逆さに読むと流石にまだ違和感をかんじるな…

『おう!!山岡か。俺は、慙愧・岡田だ。』…なんちゅー極悪そうな名前しとるんだこいつは…

『高貴君、良かったですね。友達が一人増えましたね。…高貴君の友達は僕の友達でもあります。新輔・子豚と申します、以後お見知り置きを。』

まあ、最初は乗り気は無かったが話してみると、子豚、美咲さんの二人より俺は岡田の方が話が合うらしく、久しぶりに俺の時代の友人の事を思い出した。あいつら、何やってんのかな…英明さん…考えても悲しくなるだけだな…と心の涙を拭いて子豚と岡田との会話に戻った。

岡田とマジで友達になったことを美咲さんが知ったら…そう思うと教室に入る足取りが重く感じた。

『新たな友人…??』（後書き）

御閲覧本当にありがとうございます。

大変、身勝手な事なのですが土日は小説を書くことが出来ず更新も出来ません。この場をお借りし深くお詫び申し上げます。

皆様からのご意見、ご感想、ご指摘を辛口でも構いませんので是非お聞かせください。

先週、岐阜県の飛騨へ温泉旅行に行ってきました。私も驚いたんですが雪が尋常じゃないですね…

私の住んでいる所はまだ雪が降っておらず（日本の殆どがそうだと思うんですが…）ノーマルタイヤで向かったわけです。

天候も悪くなく、快調に高速を飛ばしていると、普段は見かけぬ人が居ました。…そう。検問です。

私は見事にチェーン規制に引っかかり、人生最大の200キロコーナーをし家に帰りスタットレスに変え再び飛騨に向かいました…

皆さんも年末出かけると思いますが、寒い所に行く際にはチェーン規制だけではなく注意してください。普通は引っかかりませんよね…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5175f/>

CROSS...

2010年10月10日15時58分発行